縄文人の方位観

嶋　崎　弘　之

Ⅰ．前書き
Ⅱ．方位観説
Ⅲ．社会組織
Ⅳ．方位観
Ⅴ．縄文人の方位観

Ⅰ．前書き

この小文は「勝坂式期人の方位観」（東京考古第20号　東京考古談話会2002）の続編である。「勝坂式期人の方位観」では勝坂２式期の４つの集落址を取り上げたのに、肝心の社会組織にアプローチする手続きを経なかったため、事実に関して重大な誤認があった。集落址の主要な研究目的の１つが当時の社会組織の解明である以上、社会組織についての検討は避けて通れない。そこで今回は社会組織への接近を試みると同時に、集落で生活していた人々が行った家の跡地での儀礼についても考える。

最初に使用する用語の変更について記しておきたい。「勝坂式期人の方位観」で用いた法事という言葉に関して櫛原功一氏より次のようなご意見をいただいた。「法事というと、仏教的な性格を帯びた用語ではないかと思います。縄文時代については馴染まないのでは?」私も「勝坂式期人の方位観」を書いている時何かふさわしい造語を考えてみたが、結局適当な言葉を思いつかなかったため、内心気にしながら法事という言葉を使った。櫛原氏がご指摘されたとおりなので、ここでは法事に代えて文化人類学用語の祖先崇拝を使用する。祖先崇拝に関しては新たに後期の事例を２つ加えて、後期でも勝坂２式期と同じ方位観の下で祖先崇拝が催されたことを確認する。

Ⅱ．方位観説

縄文人が方位観を持っていたかについては小林達雄氏（1995,1996,1999a～c,2000,2002a,b,2003）により研究が進められてきた。小林氏は、縄文人が二至二分（春分、夏至、秋分、冬至）をはっきり意識していて、その日の日の出、日の入りの方角を記念物築造の設計に織り込んでいた事実は疑いないとして、「縄文人に方位の認識があり、しかも方位によっては観念を意識するものであったことは確実」（1999a）との見解を表明している。小林氏と同じ様に冨樫泰時氏（1995a,b,1999）、大工原豊氏（1995,2002a～c）、古屋敷則雄氏（1996）、原田昌幸氏（1998）、藤田富士夫氏（1998,2002）、宮尾亨氏（1999,2002a,b）、太田原潤氏（2000,2001,2002a,b,2003）、今福利恵氏（2002a,b）、岩崎義信氏（2002a,b）、小倉勝男氏（2002）、葛西勵氏（2002）、児玉大成氏（2002）、佐野一絵氏（2002）、吉川裕司氏（2002）等も縄文人が夏至や冬至を認識していたと見なしていて、該当する遺跡（主に記念物）として北海道石倉（古屋敷）、青森県上尾駮（古屋敷）、同県大石平（古屋敷）、同県大森勝山（太田原）、同県小牧野（小倉、児玉）、同県三内丸山（太田原）、同県太師森（葛西）、岩手県清水屋敷Ⅱ（瀬川司男2003）、同県門前（小倉、熊谷常正2002）、秋田県伊勢堂岱（佐野）、同県大湯（小倉、冨樫、宮尾）、同県柏子所（冨樫）、山形県長者屋敷（岩崎）、新潟県アチヤ平（宮尾）、同県元屋敷（宮尾）、栃木県寺野東（小倉）、群馬県滝沢（大工原）、同県天神原（小倉、大工原、吉川）、同県中野谷砂押（原田）、同県中野谷松原（大工原）、同県野村（大工原）、山梨県牛石（今福）、長野県阿久（今福）、富山県極楽寺（藤田）、同県不動堂（藤田）を挙げている。ほかにも岩手県樺山（稲野裕介2002）、東京都田端（松本司1999）、同七つ塚と周辺の集落址群（和田哲2002）がある。佐々木藤雄氏（2001,2002a,b）もこの考えに賛同しているらしく、長野県大野で検討している。研究者の中には勝坂式土器様式の文様

を積極的に月の運行と関連させ、長野県藤内の住居址32から出土した浅鉢（藤内Ⅱ式期）に付いている４個の中空把手を「朔月・上弦・望月・下弦の四つの月の相、ひいては一年の二至二分点と四つの方位を表徴するものであろう。」（井戸尻考古館2002）と推測している人もいるが、これらの把手がどうして二至二分点と方位に結びつくのか私には理解が及ばない。それにしてもこの研究者は時間的には瞬間にすぎない二至二分点を縄文人が知っていたと本当に思っているのだろうか。ともかく縄文人が二至二分を認識していたと確信している研究者は漸増しているものの、小林氏を除いてそれを方位観に関連付けて発言する人は少ない。

小林氏は記念物を築造する場合、青森県小牧野、栃木県寺野東、群馬県天神原、山梨県牛石ではランドマークになる山の頂上又は頂上付近から春分、夏至、秋分、冬至に太陽が昇ったり、沈んだりする場所が選ばれていて、青森県三内丸山、秋田県大湯、同県湯出野、石川県真脇では築造物の配置や向きがそれら特定の日の日の出、日の入りの方角に合うよう決められたと考えている。

二至二分との関連が指摘されている上記の遺跡を整理すると、次のようになる。

春分、秋分と関連：
　日の出―清水屋敷Ⅱ（瀬川）
　日の出と日の入り―小牧野（児玉）、太師森（葛西）
　日の入り―樺山（稲野）、中野谷松原（大工原）、牛石（今福）
春分～夏至（及び冬至?）と関連：
　日の出―阿久（今福）
春分、夏至、秋分と関連：
　日の出―アチヤ平（宮尾）、滝沢（大工原）
春分、秋分、冬至と関連：
　日の出（春分、秋分）と日の入り（冬至）―長者屋敷（岩崎）
　日の入り―天神原（大工原）
夏至と関連：
　日の出―不動堂（藤田）
　日の出と日の入り―元屋敷（宮尾）
　日の入り―大湯（冨樫）、中野谷砂押（原田）、大野？（佐々木）
夏至、冬至と関連：
　日の出（夏至）と日の入り（冬至）―伊勢堂岱（佐野）
　日の入り―柏子所（冨樫）
夏至又は冬至と関連：
　日の出―門前（夏至：小倉、冬至：熊谷）
冬至と関連：
　日の出―石倉（古屋敷）、寺野東（小倉）、藤内（井戸尻考古館）、極楽寺（藤田）
　日の入り―上尾駮（古屋敷）、大石平（古屋敷）、大森勝山（太田原）、野村（大工原）、田端（松本）、七つ塚（和田）、真脇（小林）
全てと関連：
　日の出（春分、夏至、秋分）と日の入り（冬至）―三内丸山（太田原、冨樫）
（アチヤ平と元屋敷は記述がなく写真で判断。）

これらの中で秋田県大湯環状列石については気にかかる点がある。冨樫氏（1995a）によって万座環状列石の日時計状特殊組石は夏至の日没の方角より若干西寄りに在るのが確認されている。その後柳沢兌衛氏（1999）の観測に基づく計測によって夏至の日没ラインとの角度差は７度近くあるのが現認された。もし縄文人が春分、夏至、秋分、冬至という特別な日を認識していたとするならば、大湯人にとって１年の中で一番重要な日は夏至ということになる。それ程大切な夏至の日の夕方、なぜ大湯人は日の入りに合わせて万座の日時計状特殊組石の位置を決めなかったのであろうか。この疑問に対して冨樫氏は誤差を「恐らく許容の範囲の中に入るのではないか」と言い、小倉氏（2002）は「厳密な方位の一致までは縄文人は求めなかった可能性もあろう。」と述べている。しかしながら夏至の日の入りの方角に一致しないでずれるという事実は、見方を変えると夏至の日の入りとは関係なく日時計状特殊組石の位置を設定した蓋然性もある訳で、このことは別の観点からの検討の必要性を促す。それにしても最初に大湯の環状列石が夏至の日没ラインと一致するのではないかと考えた事実とは異なる川口重一氏の説を図化した冨樫氏の「大湯環状列石の夏至の位置図」（冨樫1995b：図３）がその後小林氏（1996：218頁ほか）、藤田氏（1998：10頁）、佐々木氏（2001：図３ほか）、岩崎氏（2002a：第１図）によって使われている。冨樫氏が図化した「大湯環状列石の夏至の位置図」は注書きが添えられているうちはいいが、注書きが無くなった時点であたかも大湯では中野堂

と万座の環状列石の中心及び日時計状特殊組石を通るラインと夏至の日没ラインが一致するかのような誤解を与えかねない。この図を転用する場合、実際には夏至の日没ラインと2つの環状列石の中心を通るラインは一致せずにずれる以上、誤解を避けるためにも川口氏が想定した「大湯環状列石の夏至の位置図」と正しい「大湯環状列石の夏至の位置図」を並列して掲載するか注書きを添える必要があるのではないだろうか。大湯では2つの環状列石を結んでできた「ライン上に太陽が沈むのは、4月20日頃と、8月20日頃で」（松本1999）、夏至から2か月も前後しているようである。これでは大湯の環状列石は夏至とは無関係ではないかという強い疑念が頭をよぎる。

大湯と同じような例はほかにもあり、山形県長者屋敷では「最も基準になるのが冬至の日の入方位」（岩崎2002a）とされている4本柱址に遺存していた木柱痕の配置は、冬至の日の入りの方角とはわずかにずれている。この点について長者屋敷の4本柱址の研究をしている岩崎義信氏にお聞きしたところ、柱穴を結んだ延長線は「西黒森山の山頂に達していて、特定時期の日の出・日の入方位を意識しながらも、山容のきわだった山が重要視されたのではないかと考えています。」というご返答をいただいた。岩崎氏の考えに従えば長者屋敷人は冬至よりも西黒森山の存在の方を重視して柱の配置を決めたということになろうか。立地についても二至二分の当日には山頂でなく山頂付近から太陽が出たり沈む例として、青森県小牧野（春分、秋分：児玉2002）、栃木県寺野東（冬至：小倉2002）、群馬県野村（冬至：大工原2002c）、富山県不動堂（夏至：藤田1998）等が知られている。その他の記念物についていちいち調べていないが、恐らくこうした例はもっと多いに違いない。では二至二分の日の出、日の入りラインと完全に一致する記念物は一体どれぐらいあるのだろうか。

児玉氏（2002）によると青森県小牧野では「秋分の日から、1週間ほど過ぎた頃に雲谷山から日が昇り、岩木山方向へと日が沈む。逆に春分の日には1週間ほど前に日が昇る。」という。小牧野人にとってある日雲谷山の頂上から昇る太陽を見るのと、それから約1週間経った春分の日に山頂からやや外れた所から昇る朝日を見るのとでは、その時どちらの方に感動するであろうか。このような事実からすると、縄文人が二至二分を認識していたとしても、小牧野人は春分、秋分を正確には知らなかったか、小牧野人にとって春分、秋分とはその日を挟んだ前後1週間つまり計2週間程の期間であったと想定せざるを得ない。

青森県三内丸山（岡田康博1996）では第26号大型掘立建物跡の向きは「ほぼ夏至の日の出と冬至の日の入方向に向」（太田原2000）き、この建物跡の近くに復元されている建物では「夕日は柱の少し右側にずれて沈」（松本1999）むようである。その向きは太田原氏が報告書の実測図で、松本氏は現地に復元された建物で確認している。この建物跡の向きは北東方向に太田原氏は北から約63.5度（＝東から約26.5度）で、松本氏は東から35度になるという。太田原氏のご教示によると「建物跡と復元物の方位角には若干のずれがあるようです。」とのことなので、2人の測定値が合致しないのは多分そのことに起因しているのだろう。青森市中央市民センターのプラネタリウムと八戸市児童館のプラネタリウムの担当者に教えていただいた青森市における夏至の日の出の方角は、東から32度47分で、太田原氏の数値とは6度差がある。この点について太田原氏から「プラネタリウムの数値は水平線を基準にしたものです。しかしながら、三内丸山遺跡からみると水平線から太陽が昇るわけではありません。手前に山がある分計算値とは方位角も時間も異なった日の出となります。日の入りも同様です。」というご説明をいただき、納得できた。写真では夏至（小林1999a：表紙）にこの復元された建物の中央から日が昇り、冬至（小林2003：表紙）には同じく中央に日が沈むように太陽が写っている。「方位角には若干のずれがある」建物跡でも同様に中央から日が昇り、中央に日が沈むのだろうか。そして同じような建物であるのに重要な日の日の出、日の入りを三内丸山では建物の中軸線に合わせ、長者屋敷では対角線に合わせているとしているが、縄文人はこのように気ままな考で記念物を築造したのだろうか。

沼澤茂美氏（2002：100頁）は4000年前の二至二分の日が現在の何月何日になるか提示して、新潟県アチヤ平でのその日の日の出の景観写真を公表している。それによると当時は現在より20日弱遅く、秋分で確認すると当時と現在では日の出の方角は大きくずれる。しかし私は国立天文台の研究者にお尋ねして「現在使用されているグレゴリオ暦の精度は1

万年で３日です。従ってこの暦で4000年前の二至二分の日付は現在の二至二分とほぼ同じで、違っても１～２日です。日の出、日の入りの方位には変化はありません。」というご返事を得ている。

もし縄文人が二至二分を認識していたならば、二至二分に該当する４日のうちどの日かを一番大切な日―「特別な意味合いの日」（岩崎2002a）と見なしていたはずである。それなのに私が集計した記念物と二至二分との関連にはその日がいつだったかを裏付ける明確な偏りが見受けられないため、その日が春分、夏至、秋分、冬至のうちどの日だったのか分からない。どうしてだろうか。常識的には「特別な意味合いの日」に合わせて記念物を築造すると思うのだが。もし記念物を特定の日の日の出や日の入りに合わせて築造していたとすると、当日の様子は次のどちらかであったと思われる。人々は当然この日が来るのを心待ちしていたはずであるから、人々はこの日がやって来る瞬間にあたる日の出を朝早くから起きていて眺めたであろう。あるいは日が沈むのを―日の入りを待ってこの日が到来したのを祝う祭りを始めたであろう。しかし日の出と日の入りのどちらが大切であったのか、集計した記念物では二至二分の日の出に関連する事例と日の入りに関連する事例は、数の上で大差がない。なぜだろうか。又、何ゆえに二至二分の日の出、日の入りの方角と完全には一致しない記念物の事例が多いのだろうか。そして二至二分とのかかわりは専ら記念物との関係で論じられているが、記念物を築造していない一般的な集落址では二至二分に関連した人々の行動の痕跡が見られないのはどうしてだろうか。上記した４つの根本的な疑問が内在する二至二分認知説には、懐疑的にならざるを得ない。

ところで二至二分の日の出、日の入りを方位観に結び付けた場合の弱点は、上記の記念物では北東（夏至の日の出）、東（春分、秋分の日の出）、南東（冬至の日の出）、北西（夏至の日の入り）、西（春分、秋分の日の入り）、南西（冬至の日の入り）の６つの方角のうち、どの方角が縄文人にとって最も重要な方角であったのか、記念物の数の上で明確な偏差が認められないため見えてこないことである。

Ⅲ．社会組織

a 双分組織論

私が「勝坂式期人の方位観」で扱った４つの集落址―神谷原（新藤康夫・小林奈緒美1982）、多摩ニュータウン471（岩崎陽一1990、小薬一夫1993）、同446（千田利明1997）、滑坂（佐々木克典1988）では勝坂２式期に祖先崇拝を行った形跡があるが、ここではまず社会組織について検討する。

これらの集落址は今まで何人かの研究者が取り上げて分析してきた。集落研究の方向は問題意識の違いによって、大きく２つに分かれる。１つは土器型式の細分を進める中で限りなく同時存在に近い竪穴住居を確認して、集落の変遷をより詳細に把握することであり、集落は少ない軒数の家で構成されているという実態が明確化されている。もう１つは社会組織の究明という観点からのもので、集落空間が二分割されることを確認して、二分された集落を社会組織の反映と見なし、集落は双分組織で成り立っているという見解で一致している。ここでは後者の研究を中心に据えて、４つの集落址を図１に示し、研究の現況を確認しておきたい。図１について補足すると、神谷原や滑坂のように存続期間の長い集落址は報告書で勝坂２式期と時期比定された住居址だけを表示した。又、谷口康浩氏は分割ラインを明示していないので、記述内容から判断させていただいた。

・神谷原の集落址

小林達雄氏（1993）は２つの住居群が明瞭に存在するのが認められると指摘している。

安孫子昭二氏（1997b）は全ての住居（五領ヶ台２式期～勝坂２式期）の分布を基に住居が存在しない空隙に注目し、その場所で集落が二分されるとしている。そして分割ライン（ラインＡ）の内角15度の範囲は墓壙が設営されていないことから、そこを双方の集団の共有地と考えている。

谷口氏（1998a）はこの土地で最初に竪穴住居を建築した五領ヶ台２式期に集落の二分構造が形成され、その後も踏襲されていると記している。分割ライン（ラインＴ）は安孫子氏の見解と一致するようである。

・多摩ニュータウン471の集落址

小薬氏（1995）は炉の形態の違いを基に集落の変遷を辿っている。そして地域特性のある添石炉が近隣の集落でどう展開されたか概観している。

谷口氏（2002）は住居が東西に分かれ、「い」の字状に分布し、東群（９軒）と西群（11軒）が直列の状態で対向していて、墓域も２か所ある点

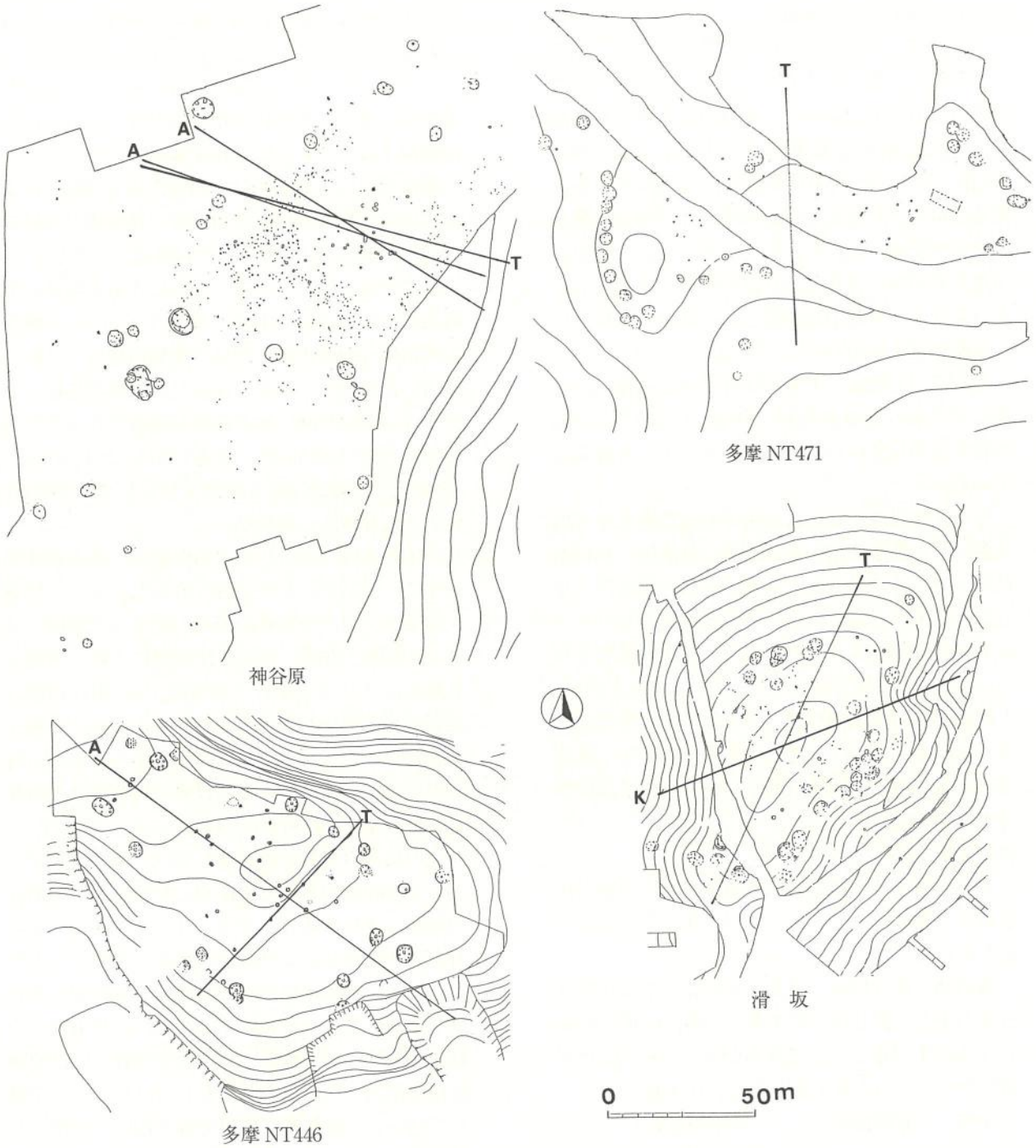

図１　集落の空間分割説（勝坂２式期）

を注視している。集落の分割ライン（ラインＴ）は図に示した辺りであろう。

・多摩ニュータウン446の集落址

安孫子氏（1997a）は住居の分布に基づいて、その配置に数軒のまとまりがあるのに注目して、南北を２大群に区分し、それぞれの大群を更に４小群に分けている。竪穴住居の規模から北西の高台にある２軒の住居（住居6,7）を２大群のそれぞれのリーダーが住んでいた家と考え、両住居の中間に在る２基の墓（墓壙19,20）にリーダーが埋葬されていると推測して、墓壙19を住居６と、墓壙20を住居７と結び付けている。そしてこの２基の墓壙を分ける形で集落空間の分割ライン（ラインA）を設定している。しかし安孫子氏がリーダーの墓と見なした墓壙19,20は副葬品が伴わないので、リーダーの墓ではないであろう。安孫子氏は

ここと神谷原の人口推計を行っているが、小林謙一氏（1998）は集落の人口を安孫子氏の推計値の半分程度ではないかと考えている。同様に黒尾和久氏（2001）も土器の「一細別型式の単位時間幅は」竪穴住居の存続期間よりも長いことから、「安孫子氏の一時的集落景観の復元案および集落変遷観は成立しえないであろう。」と発言し、集落の規模を安孫子氏よりも小さく見ている。小林氏、黒尾氏共同時に存在した住居の軒数のみに関心があるようで、安孫子氏が提示した双分組織について言及が見られない。

谷口氏（1998a）は神谷原の場合と同様に一番先に建てられた竪穴住居（住居1A-1B,4-5,13,23）の在り方から住居の２大群（ラインＴ）を想定している。

今竪穴住居址、集石、墓壙等の建造物を全て取り除いて、集落が造られる直前の原風景に思いを馳せると、この場所は北西側が高台の緩傾斜になっている舌状台地で、安孫子氏が設定したラインは自然の地形を均等に分けているのが理解される。谷口氏の空間分割ラインは高い土地（北西側）と低い土地（南東側）に二分され、不均等分割になっている。私はリーダーの墓と祖先崇拝で建築された家との位置関係（図２）から安孫子氏のラインAを支持したい。

・滑坂の集落址

小林達雄氏（1993,1996）は集落が２つの竪穴住居群より成り立っていて、東西２群に分かれると記している。

櫛原功一氏（1994）は主柱穴の数を基に住居型式を設定し、同じ設計による同一型式の住居が群在するのをつきとめ、それらがラインKで南北２群に分かれて、占地するとした。具体的には

主柱	＝北側住居＝	＝南側住居＝
４本	：23	30,32,35,38,42,89
５本A	：14,26,28,55	
B	：54.58	11
６本A	：24	2,4,5,43,46
B	：	60,64,66
８本	：	34

（主柱の数が不明の住居：6,18,33,51,87）

となり、「大きくは五本主柱の北群と、四･六本の南群が中央広場をはさんで対峙する形を示す。」

谷口氏（1998a）は勝坂２式古期（＝2a式期）に比定される５軒の住居が集落の基礎構造を形成したものと推定し、南北の住居がそれぞれ対になってラインTの所で集落は東西に分かれると判断あれた。恐らく小林氏の空間分割ラインも谷口氏が推測するラインTに一致するであろう。

馬橋利行氏（1998）は中山真治氏（1995）による住居の時期細分比定を用いて、櫛原氏と同様に主柱穴の配置で住居類型（住居型式）を設定して、集落の変遷を辿っている。それによると集落の形成段階である新道式新期～藤内Ｉ式古期（=勝坂１式新期～2a式古期）では、北側の住居（３軒：住居15B-53,24A）は６本柱Ａ型、南側の住居（３軒：住居2A-2B,64）は６本柱Ｂ型というように南北に展開する住居群には違いが見受けられる。（櫛原氏と馬橋氏は同じ視点で分析していながら、住居２は分類が一致しない。）

戸田哲也氏（2001）によると狢沢・清水台式期（=勝坂１式古期）に住居29が存在したが、一時無人になり、その後集落の形成が始まった藤内Ｉ式期（=勝坂2a式期）の住居は北側に６軒、南側に６軒が「こ」の字状に分布する。（戸田氏が示した図と表は住居24が遺漏されているため、北側が５軒になっている。又、住居址29からは異なる時期の土器が出土していて、ほかの研究者はこの住居の時期比定を保留している。）

この集落の空間分割に関しては、同一の設計による家の配置のあり方を確認した櫛原氏、馬橋氏の見解に注目すると、ラインTよりもラインKの方が蓋然性は高いように思われる。というのも谷口氏自身（2002）神谷原の集落址の分析で、神谷原では新道式期（＝勝坂１式新期）に北東群（大型住居３軒）と南西群（小型住居６軒）には明確に住居型式が異なる家が存在していたことを指摘しているし、群馬県三原田でも東西に二分割された集落空間で住居型式の違う竪穴住居が偏在（谷口氏の言葉を借用すると「排他的に占地」）していると記していて、ラインKは谷口氏による神谷原と三原田の分析結果との整合性が認められるからである。

ただ集落の開始時に建築された竪穴住居の軒数は研究者によってまちまちで、住居址同士の間隔及び切り合いの有無を考慮して判断すると、中山氏は１軒（勝坂１式新期：住居2B）、佐々木克典氏は２軒（勝坂１式期：住居2B,15-53）、谷口氏は

4軒（勝坂2a式期：住居2B,15B-53,24,64）、戸田氏は9軒以下（勝坂2a式期：住居2,5,15-53-54,24,38,42,55-56,60,64）という具合で、住居址の時期認定の難しさが露呈されている。

b社会組織にアプローチする方法

集落址を分析して当時の社会組織に接近するには先ず集落を統率していたリーダー格の人物の墓を特定する必要がある。そこで多摩ニュータウン471、同446、滑坂の集落址で検出された墓壙について整理しておきたい。

・多摩ニュータウン471（墓壙総数34基）
　副葬品を伴うもの（5～6基）
　　土器
　　土器1個体＋大型の土器片：墓壙18
　　土器1個体：墓壙13
　　石器
　　2個（打製石斧＋石匙）：墓壙1
　　1個（石匙）：墓壙10,20
　　大石：墓壙2（大石が副葬品か不明）
　副葬品を伴わないもの（28基）
　　墓壙3～9,11,12,14～17,19,21～31,52～54
・多摩ニュータウン446（墓壙総数24～27基）
　副葬品を伴うもの（3～4基）
　　土器の部分＋石器
　　土器の底部＋石器1個（石匙）：墓壙79
　　中型の土器片＋石器1個（磨石）：墓壙127
　　石器
　　磨石1個：墓壙54（「遺物なし」の記載）
　　礫器1個：墓壙94
　副葬品を伴わないもの（20～23基）
　　墓壙6,19,20,27,72?,73,75,83?,84,86,92,93,100,103～105,116,118,128,129,130?,135,139
・滑坂（墓壙総数不明）
　副葬品を伴うもの（3基）
　　土器の部分＋石器
　　中型の土器片＋石器1個（打製石斧）：推定墓壙104,135
　　石器
　　剥片石器1個：墓壙28
　副葬品を伴わないもの（数基以上）

副葬品から判断すると、各集落址では次の2名の人物が集落内で重要な立場にあったリーダーと言えるだろう。それを裏付けるかのように、2人を対象に後日祖先崇拝が行われている。

多摩ニュータウン471：墓壙13,18の被葬者
多摩ニュータウン446：墓壙79,127の被葬者
滑　坂：推定墓壙104,135の被葬者

それぞれの墓壙（多摩ニュータウン471の墓壙13と18、同446の墓壙79と127、滑坂の推定墓壙104と135）の副葬品の土器には型式的な違いが認められないことから、この2人は同世代の人物であったと見なされる。神谷原の集落のリーダーであったと考えられる墓壙87の被葬者を加えて、彼らの墓と祖先崇拝で建築された家があった場所を確認してみよう。図1に示した集落空間の分割ラインを書き加えると、図2のようにその位置ははっきりする。

神　谷　原：北東側―墓壙87→住居址110
多摩NT471：東側―墓壙18→住居址？（湮滅か）
　　：西側―墓壙13→住居址35
多摩NT446：北東側―墓壙127→住居址23
　　：南西側―墓壙79→住居址U2
滑　坂：北側―推定墓壙104→住居址54
　　：南側―推定墓壙135→住居址42

多摩ニュータウン471、同446、滑坂では2人のリーダーは分割された2つの集落空間のそれぞれに埋葬され、彼等を対象とした祖先崇拝も同じ空間内で行なわれている。（多摩ニュータウン471では墓壙18の被葬者の祖先崇拝で建てた家の跡は発見されていないが、道路建設で破壊された南側の部分に存在していたのだろう。）

各集落におけるリーダーの特定が済んだので、次に2人のリーダーが生前住んでいた家を確認したい。1軒の家にこの2人のリーダーが暮らしていたならば2人は夫婦であり、別々の家で生活していたのが分かれば2人は他人ということになる。前者の場合には集落は単一の組織で、図2の空間分割ラインは意味を持たなくなる。もし2人のリーダーが別々の家に居住していて、その2軒の家が二分割された集落空間のそれぞれに存在していれば、集落は双分組織ということになり、いずれの場合にも当時の社会組織が浮かび上がってくる。

これから検討しようとしている3つの集落址―多摩ニュータウン471、同446、滑坂のうち、多摩ニュータウン471は南東の部分が道路建設によって破壊されているため、何軒かの住居址が湮滅してしまったと推測され、その分集落址としての資料的価値が低減している。それでここでは多摩ニュータウン446と滑坂を取り上げる。

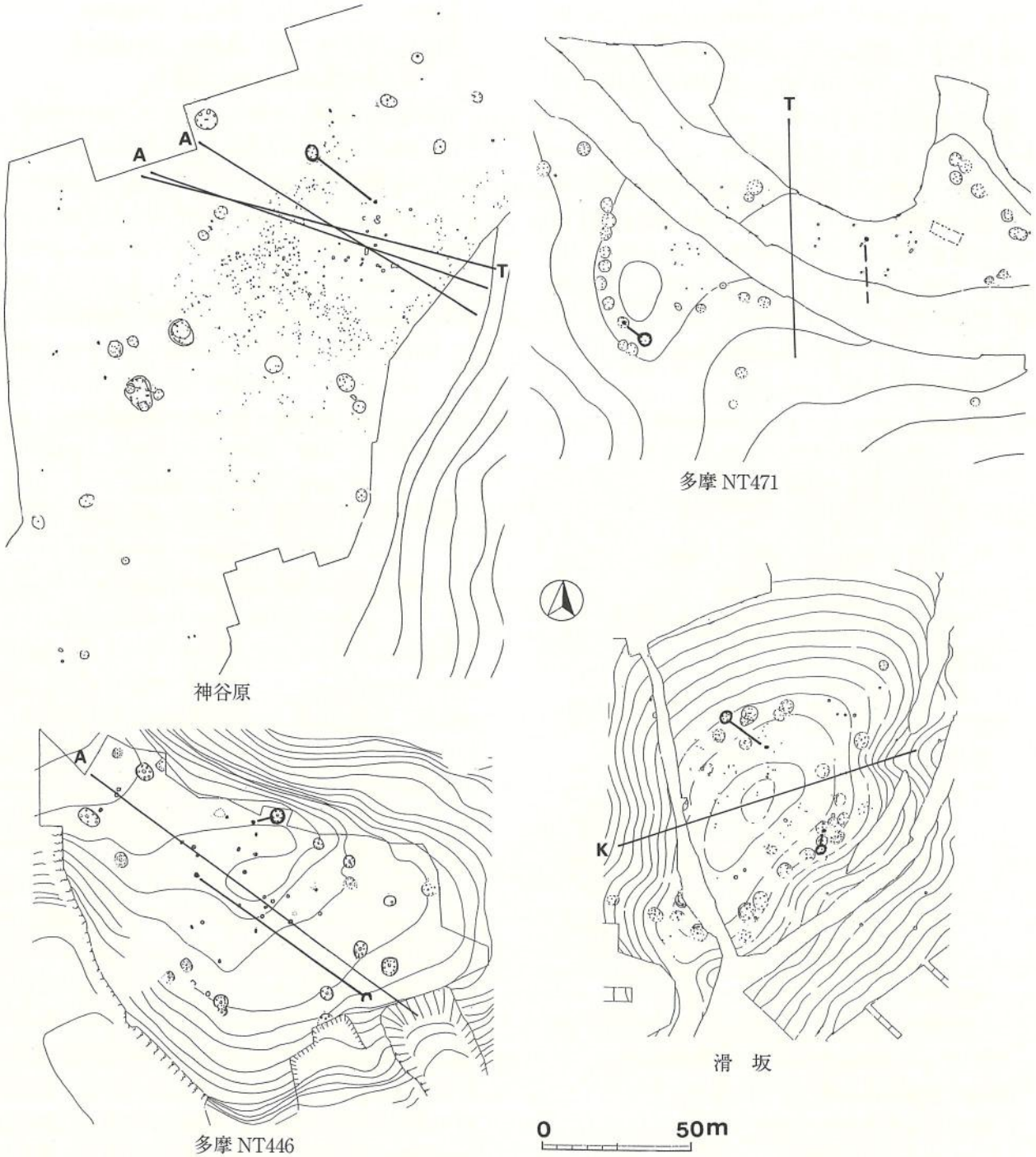

図２　集落の空間分割とリーダーの墓及び祖先崇拝で建築された家の位置関係

c 多摩ニュータウン446の集落址

i リーダーの家

この集落址で検出された竪穴住居址は全部で18軒であるが、報告書に「埋甕というより住居の埋甕炉の可能性が高い。」と記されている埋甕も住居址に含めると、総数20軒になる。埋甕２はリーダーである墓壙79の被葬者に対する祖先崇拝の際に築造されたものであるが、他の３つの集落と多摩ニュータウン446のもう１人のリーダーの祖先崇拝でも建造されたものは全て竪穴住居であることから、埋甕２も竪穴住居址であると判断できる。埋甕１については埋甕２と同様に掘り込みがあって、中央付近に炉が造られていて、竪穴住居址と思われる。

20軒の中で注目されるのが住居址７である。この

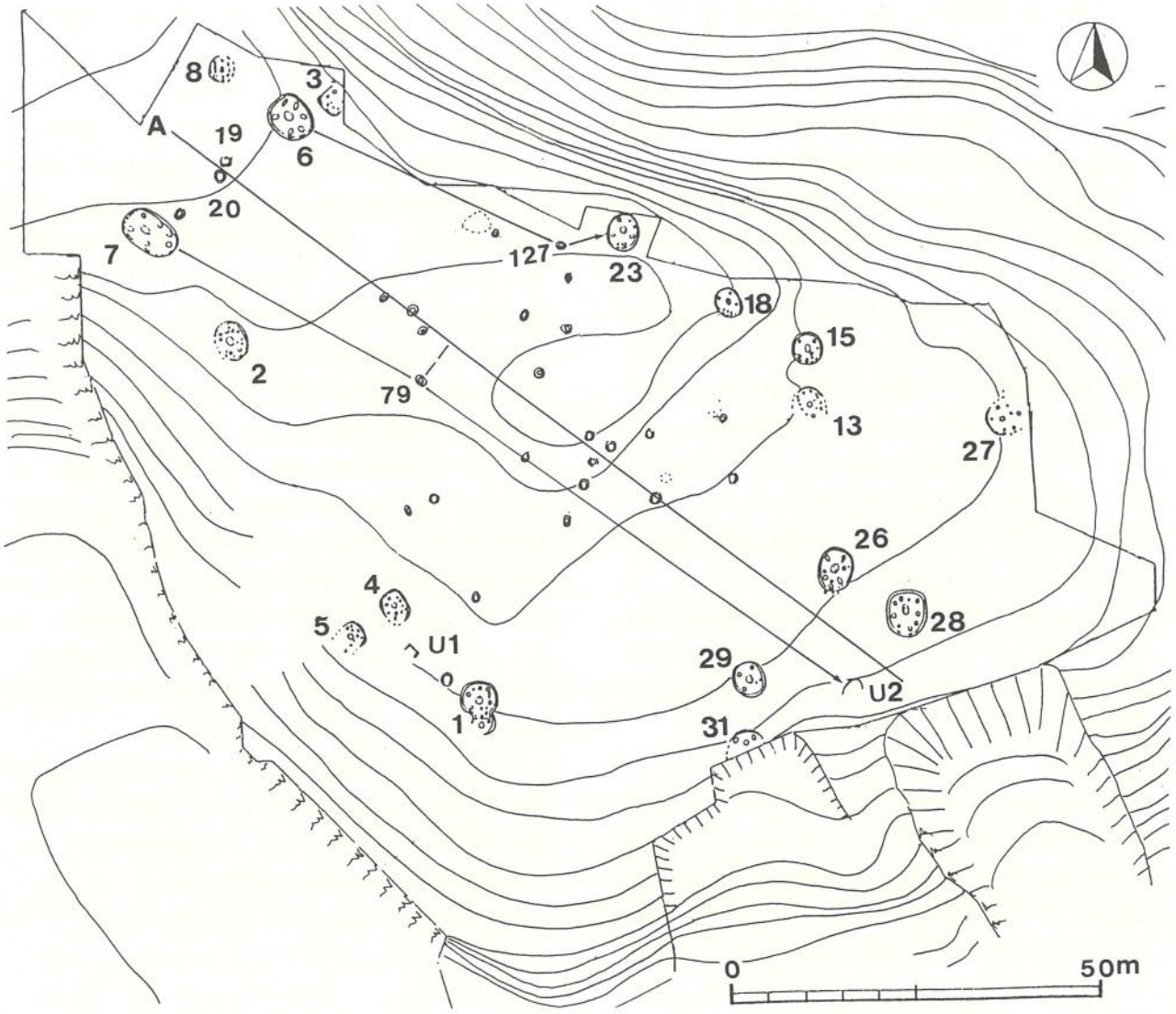

図３　リーダーの家と墓及び祖先崇拝で建築された家の位置関係（多摩NT446）

住居址は規模が最大であるばかりでなく、炉の大きさも際立っている。このことより住居７がリーダーの家であったと推定される。２人のリーダー（墓壙79と127の被葬者）が夫婦であれば、これで問題は解決するが、他人であったとするともう１軒リーダーの家があったはずである。そこで２番目に大きな家の跡を探すと住居址６と28の２軒がそれに該当するのが分かる。住居址28（図５）は主柱穴が９個あるが、造りは他の一般的な竪穴住居址と変わらない。それに比べ住居址６は入口に施設が付けられ、壁柱穴が唯一全体に巡っている。後で詳述するが、入口の付帯施設は住居址７と共通するものがある。そのため住居６がリーダーの家の候補になる。

ではどのようにして２名いるリーダーのそれぞれの家を割り出せるであろうか。２人が夫婦なら住居７が両人の家であり、他人ならそれぞれ住居６と７が生前の居住家屋に該当する。残念ながら２人の副葬品から住んでいた家を突き止める手懸りを得ることはできない。そこで住居６と７が建っていた場所と墓壙79と127が造られた位置が重要なポイントとなるであろう。住居址と墓壙の位置関係から、リーダーの家は１軒ではなく２軒であったと見なすのが妥当ではないかと私は考えている。つまりリーダーの１人である墓壙79の被葬者が暮らしていた家は住居７で、もう１人のリーダー（墓壙127の被葬者）は住居６に住んでいたと推測した。この判断を導いた根拠を図３で具体的に見ておきたい。

・住居址６の東壁から墓壙127迄の距離は37mで、住居址７の東壁から墓壙79迄の距離は38mである。

・２基の墓（墓壙79と127）は生前の家（住居６と７）から同じ方向（南東）の場所に造られている。
・墓壙79と集落の分割ライン（ラインA）迄の距離は７mで、墓壙127と祖先崇拝で建築された家（住居23）の西壁迄の距離も7mを測る。
・墓壙79と祖先崇拝で建てられた住居U2を結んだ直線は、分割ライン（ラインA）に対しほぼ平行になる。
・後で述べるように儀礼が行われた家の跡地は６軒（住居址1A,5,6,7,13,28）あるが、その中でリーダーの住居址６と住居址13の距離は73.5m、別のリーダーの住居址７と住居址1Aの距離は74mである。そして儀礼の時、住居址５と６及び住居址７と13では共通の用具が使用されている。

上記した５項目により、私はこの集落が双分組織で成り立っていたと信じるようになった。

ではリーダーの家はどのような特徴があるのだろうか。リーダーの家の跡と目される２軒の住居址を図４に示し、検討したい。まず一番大きな住居址７から調べてみよう。

・住居址７

最大の住居址で、南東側に１m近く張り出し、炉も巨大である。規模は張り出し部を除くと7m65cm×5m15cmで楕円形を呈し、炉は1m52cm×1m8cmの添石炉で、南東側に礫が２個置かれている。入口は張り出し部ではなく、床面に浅い窪みのある部分とみられる。入口は両側共２本組柱になっているのが特徴といえる。奥壁寄りに左右２か所壁柱穴が掘られている。壁柱穴を結んでできた空間は居住空間全体の３分の１程度である。壁柱穴を結んでできたラインのうち、ラインabは炉内に作られた２つの小さな窪みの中心を通っていて興味深い。

・住居址６

規模は6m25cm×5m45cmの円形に近いプランをしている。炉は２つあり、中央のものは大きく１m４cm×83cmで、南東部に礫が１個添えられている。改築されていて、６個の主柱穴の組み合わせは図上段右のようになるであろう。住居址７と同様に入口近くの主柱は２本組柱であったと推定される。入口は対の小柱穴が２組あって、独特の造りをしている。壁柱穴が巡るが、その数は南側が多い。壁柱穴同士を線で結ぶと、それぞれの壁柱穴が対応していることが分かる。壁柱穴は図示したように複雑な対応関係を示していて、４つの方向を考慮して配置されている。ほかに注目されるのは炉石と平行して炉の上にかかる数本のラインである。中央の大きな炉は３方向のラインがかかるが、その内訳は１本、２本、４本の計７本になる。このうちの２本と４本のラインはそれぞれ平行になっている。東側の小さな炉は３方向の壁柱穴を結んでできた３本の直線の交叉（差）点にあり、大きな炉とは異なる。勝坂式期に平行と交叉（差）という対概念が存在していたか不明であるが、２つの炉は大きさの大小とか石の炉と地床炉という形態の違いや形状の差異を含めて幾つかの二項対立が表現されているのは確かだろう。壁柱穴の配置状態を観察すると、勝坂式期人が家の設計について高度な能力を持っていたのが分かる。住居址７は主柱穴の内側に存在する小柱穴の対応関係を掴むことができないでいるが、住居址６,７は他の住居址と比較するとかなり手間をかけた造作になっていて、特に入口を豪華にしていたように映る。そしてどちらも壁柱穴のいくつかは炉の位置を意識して配置されている。これには家の炉に特別な思い入れを持っていたように感じさせられる。

もう少し詳しく壁柱穴について見ておきたい。２軒の住居址に共通する４個の壁柱穴を北東寄りのものから順にa,b,c,dと呼称して、深さを確認すると

住居址６—a:55 b:25 c:32 d:21,24

住居址７—a:55,28 b:31 c:53 d:28（単位cm）

となり、住居址６,７共ａがｂより、ｃがｄより深くなっているうえ、一番深いのはａで、逆に最も浅いのはｄである。又、４個の壁柱穴のうち１個は、位置が異なるものの連結していて、どちらも壁際の壁柱穴が内側の壁柱穴より深い。このように細部においてもこの２軒の家には共通点が見いだせる。

ⅱ家の跡地での儀礼

この集落では家の跡地で儀礼が行なわれている。谷口氏（1998b）は竪穴住居が廃絶されてから埋没する過程には多様な行為の痕跡が明らかに包含されていて、住居の廃絶に伴う祭祀を想定する見解にも傾聴する必要があると説いている。渡辺新氏（1991）は「住居廃絶に際して行われたと考えられる儀礼」の存在を指摘し、篠崎譲治氏（1999）も「“廃屋の窪み”は、縄文人が儀式をとり行う場であった」と述べ、忍澤成視氏（2003）は「廃絶された住居跡は特別な意味のある場」と記している。

総数20軒の家のうち図５に示した６軒では、家の跡地の主に奥壁に近い柱穴で儀礼が行なわれてい

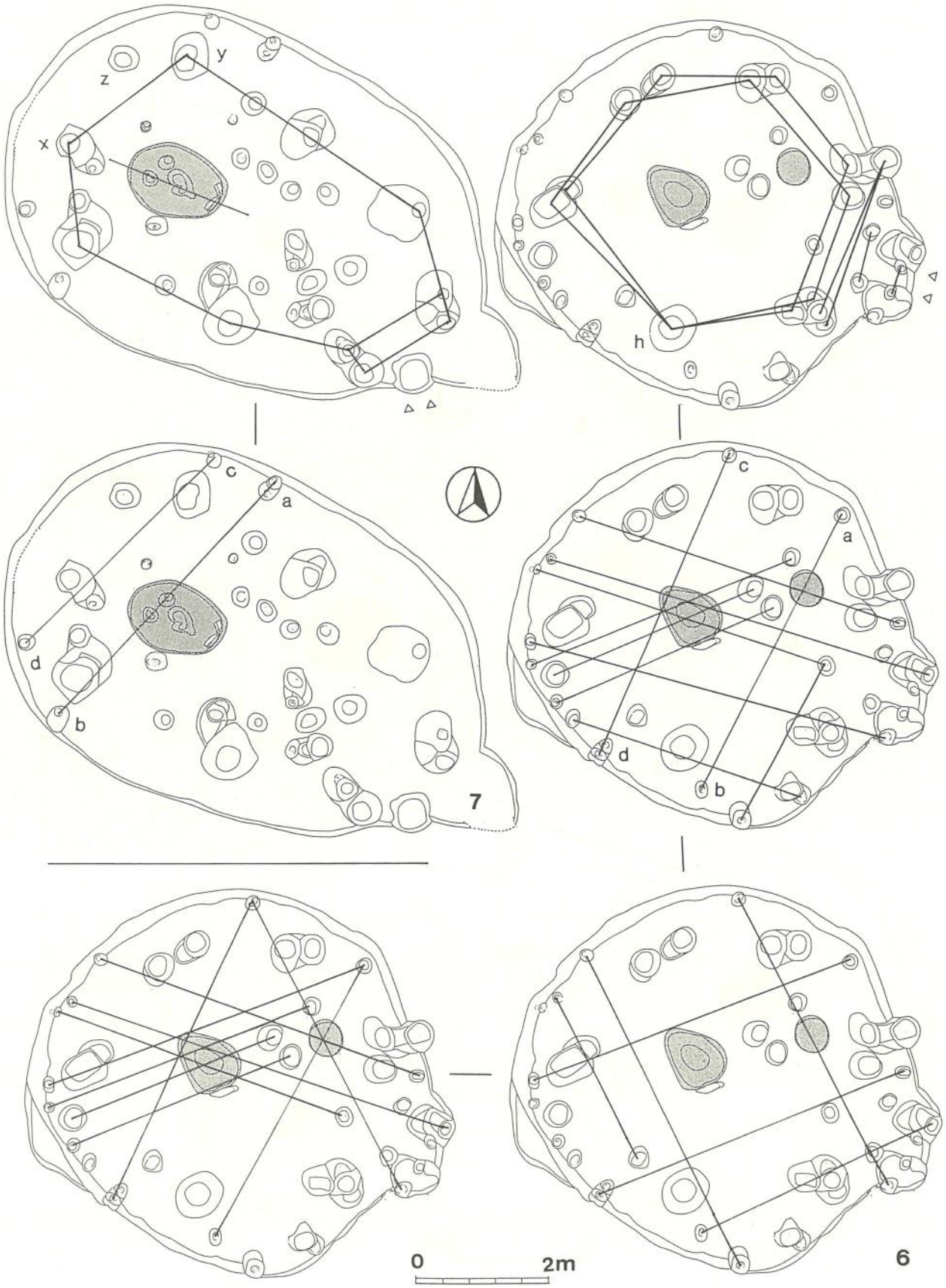

図4　リーダーの家（多摩NT446）

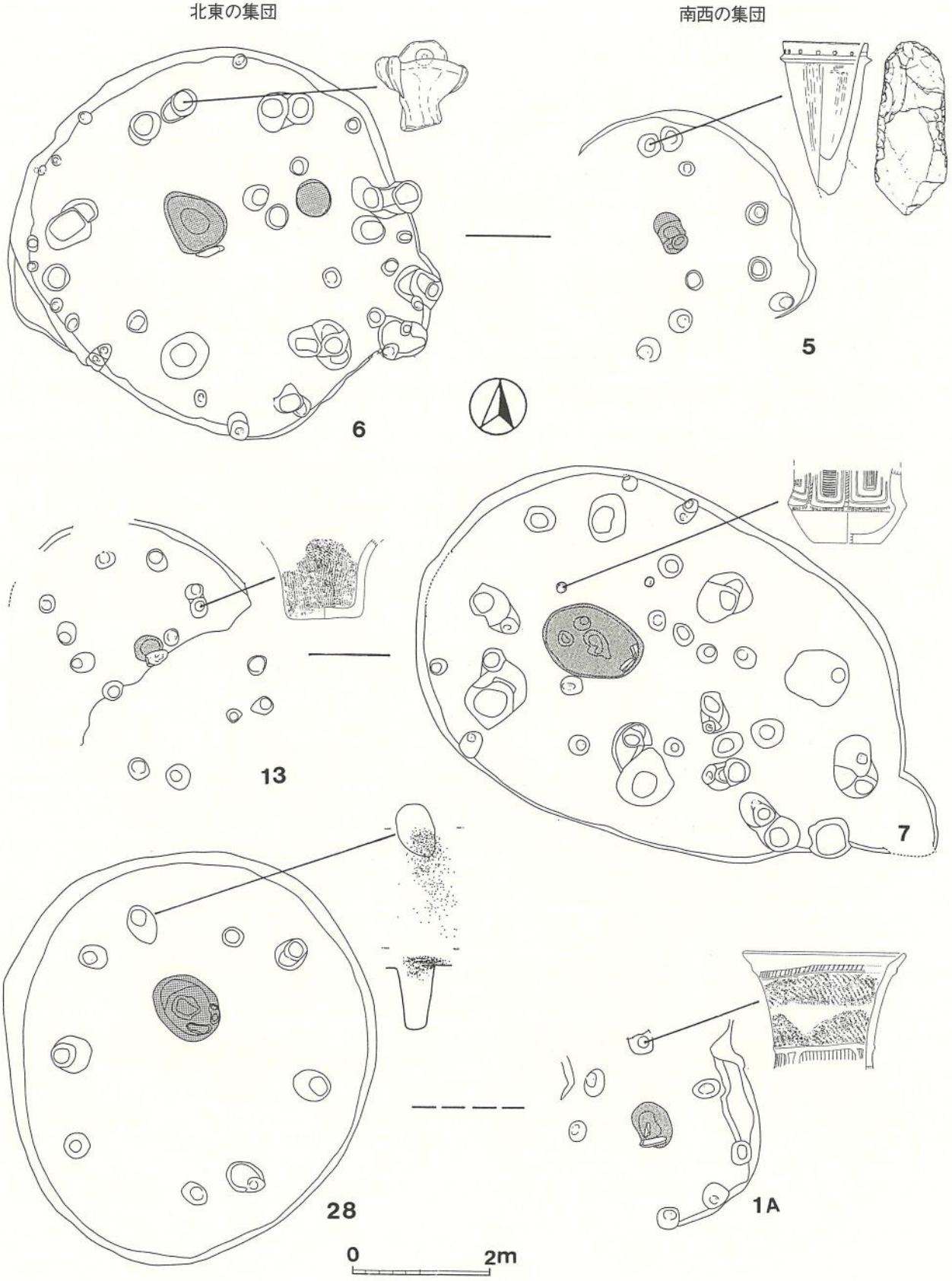

図5　儀礼が行われた家の跡地とその対応関係（多摩NT446）

る。どの家の跡地も１か所の柱穴が選ばれていて、柱穴の中から土器が検出される訳であるが、該当する柱穴の位置は全て炉よりも北側にあることから自然の営力によって土器が柱穴内に流入したとは考えられない。遺物の出土状況は報告書に次のように記されている。

住居址1A：土器の上半部２分の１強が北側の柱穴内より出土。

住居址５：ミニチュアの有孔鍔付土器と打製石斧が北側の柱穴内より並んで出土。遺物の出土レベルは床面よりやや下がった位置で柱穴がほとんど埋まりきった時に廃棄ないし置かれた状況を示している。

住居址６：完形のミニチュア土器が北側の柱穴の上面より20cm程下の所で出土。柱穴の深さは78cmなので60cm近く埋まった後になる。

住居址７：約３分の１が残る底部で、炉の北側のピット中に埋め込まれたかたちで出土。

住居址13：炉の北東側の柱穴より、柱穴が大半埋没してから、土器の下半部が投棄されている。

住居址28：北側にある柱穴の南半から南にかけて多量の細礫が柱穴内に入り込んだ状態で出土。細礫は床面と同一レベルかそれより上のものが多く、柱穴がほとんど埋没した段階で投棄した様子がうかがえる。

土器を柱穴に入れる行為は、家が廃絶されて柱穴が埋まりきる少し前になされたようで、細礫の散布も同じような時間の経過を経て行われている。場所は炉から見ると住居址13は北東の柱穴が対象になっているが、残りの５軒では北から北西の柱穴である。住居址７以外いずれも主柱穴であり、住居址７だけは土器の底部を埋置するために浅く小さなピットを掘っている。使用された土器はミニチュア土器、土器の上半部、下半部等まちまちで、打製石斧や多量の細礫が用いられる場合もある。上記６軒の家の跡地でなされた行為の目的が何であったのか不明であるが、廃絶された６軒の家の跡地で行われたことはその家に対する儀礼行為であろう。後で検討する滑坂でも同様の儀礼が西北西の主柱穴で１回行われている。同じ勝坂２式期の代継・富士見台（竹田均2000）の住居址１では奥壁間際の北と北北西の２個の主柱穴に完形に近い土器が入れられている。このような家の跡地での儀礼行為の痕跡は勝坂式期のほかの集落址にも存在する。私は今儀礼の事例を集成中であるが、儀礼として柱穴に土器を入れる場合だけでなく柱穴の縁辺を掘り窪めてそこに土器を設置する場合や柱穴の傍らに土器を置く場合等があるのを確認している。勝坂式期人の儀礼行為については小文にまとめる。

儀礼の内容を整理すると

儀礼の場所の範囲：北～北西―５回（住居址1A,5,6,7,28）
：北東―１回（住居址13）

儀礼の場所：主柱穴―５回（住居址1A,5,6,13,28）
：小ピット―１回（住居址７）

儀礼用具：土器―５回（住居址1A,5,6,7,13）
：細礫―１回（住居址28）

となり、１回は儀礼の内容（儀礼の場所の範囲、儀礼の場所、儀礼用具）の一部を変えている。

儀礼が行なわれた家の跡地の位置的な対応関係は

＝北東の集団＝　　＝南西の集団＝

住居址６（共通）― 住居址７（変更）

住居址13（変更）― 住居址５（共通）

住居址28（変更）― 住居址1A（共通）

となるが、そのうちの一方は儀礼内容が一部変更されている。

では儀礼の対象になった家は何を基準に選ばれたのであろうか。それを知るために炉についてまとめておきたい。20軒の家の跡を炉の違いで分類すると、次のとおりである。

土器＋石の炉：住居址27

土器の炉：住居址8,23,U1,U2

石の炉：住居址1A,1B,4,5?,6,7,13,15,18,26,28

地床炉：住居址2,29

炉が不明：住居址3,31

（住居址５は報告書では地床炉?と記されているが、そのすぐ後に「複雑な有段部を有するため、添石炉の石が消失した可能性が高い」と続くので、石の炉？と判断。）

炉に注目すると、この集落では石の炉をもつ家の跡地で儀礼が行なわれたことが分かる。又、北東の集団と南西の集団とは儀礼の回数が同じになっている。

北東の集団：３回（住居址6,13,28）

南西の集団：３回（住居址1A,5,7）

そればかりか儀礼に使用する土器も３回のうち２回は共通なものが選ばれている。儀礼用具から確認される対応関係は、次のようになる。

住居址６（北東の集団）―住居址５（南西の集団）：どちらもミニチュア土器で、共に口縁部から底部迄残っている。住居址６の土器は完形であるが、住居址５の有孔鍔付土器には剥離痕が認められる。

住居址13（北東の集団）―住居址７（南西の集団）：両方共胴部下半から底部にかけてで、同じ位の大きさの土器である。住居址13の土器は底部が完存するが、住居址７の土器は底部が欠けている。土器の計測値を下に示す。

住居址13：9.7㎝（現存高）×8.5㎝（底径）

住居址７：9㎝（現存高）×8㎝（推定底径）

ではなぜ儀礼が行なわれた家の跡地の位置関係は住居址６―住居址７、住居址13―住居址５、住居址28―住居址1Aなのに、使用した儀礼用具での対応関係は住居址６―住居址５、住居址13―住居址7、住居址28―住居址1Aなのだろうか。図５を見ると、どの場合も一方の家は規模が大きく、他方は規模の小さな家であったことが分かる。つまり家の広さでは広い家と狭い家の組み合わせとなっている。恐らくこの集落での儀礼には広いと狭いという二項対立が重要な要件になっていたのだろう。そのため２人のリーダーが住んでいた家の跡地では儀礼に同一の用具を使うことができなかったものと思われる。そして住居址６と住居址５、住居址13と住居址７ではそれぞれ同一の儀礼用具を使用していながら、北東の集団は完存したものを用い、南西の集団は欠損したものを使っていることから、北東と南西の両集団は儀礼用具にも完存と欠損という二項対立を儀礼に反映させていたらしい。

ⅲ２つの集団

安孫子氏が設定した集落空間の分割ライン（ラインA）を適用すると、２つの集団は

北東の集団

家：10軒（住居3,6,8,13,15,18,23,26～28）

墓：12～14基（墓壙19,54,72?,73,94,103,116,118,120,127,129,130?,135,139）

南西の集団

家：10軒（住居1A,1B,2,4,5,7,29,31,U1,U2）

墓：12～13基（墓壙6,20,27,75,79,83?,84,86,92,93,100,104,105）

となる。同時に存在していた家の数は後述するが、北東と南西の集団の大きさは同じ位であったようである。

ｄ滑坂の集落址

ⅰ集落址

図１と図２は佐々木克典氏によって報告書に示された勝坂２式期の集落址であるが、ここではもう少し時期を限定して検討したい。２人のリーダー（推定墓壙104,135の被葬者）に供した副葬品の土器は勝坂2a式に属すので、この両人が住んでいた家の時期は勝坂2a式期かその直前ということになる。すでに述べたように住居址の時期認定は研究者によって齟齬をきたしている。そこで佐々木氏、中山氏、谷口氏、戸田氏の４人の考えを最大限尊重すると、勝坂2a式期及びその少し前の時期に該当する家は、13軒（住居2,5,6,15,24,38,42,53～56,60,64）であり、これを対象とする。

ⅱリーダーの家

13軒のうち最も規模の大きい家である住居2Bと２番目の規模を有する住居53がリーダーの家と判断されるので、この２軒の家の跡を図６に示し見ておく。

・住居址2B

住居址２はA（新）とB（旧）が重複していて、Bの中にAがすっぽり入っている。報告書ではAを勝坂２式期、Bを勝坂１式期としている。Bについて観察するにはAを除去する必要がある。北西部分に掘られている溝はAの主柱穴に連結しているのでAのものであろう。Bは一番規模が大きな住居址であり、7m20㎝×5m36㎝の楕円形を呈している。炉は地床炉で、家の広さに反し小さい。楕円形の形状をしている住居址はほかに４軒（住居址5,15,24,60）あるが、それらは主柱穴が５～７個なのに、この住居址はそれより多い。入口の造りに特徴があって、入口付近にある２本の主柱のすぐ内側に対になる小柱を隣接させて立てるように、小柱穴が掘られている。唯一周溝が巡るが、それも全周しないで北西側に限られている。周溝の両端を結ぶと、居住空間全体のうちで奥壁側の部分に３分の１程度の空間が確保されているように見える。

・住居址53

住居址53は北側が住居址54と重複していて、新旧関係は住居址53の方が古い。規模は6m×5m80㎝で、ほぼ円形のプランになる。炉は住居54の建築時に上部が削られてしまったため、石の炉か地床炉か明確

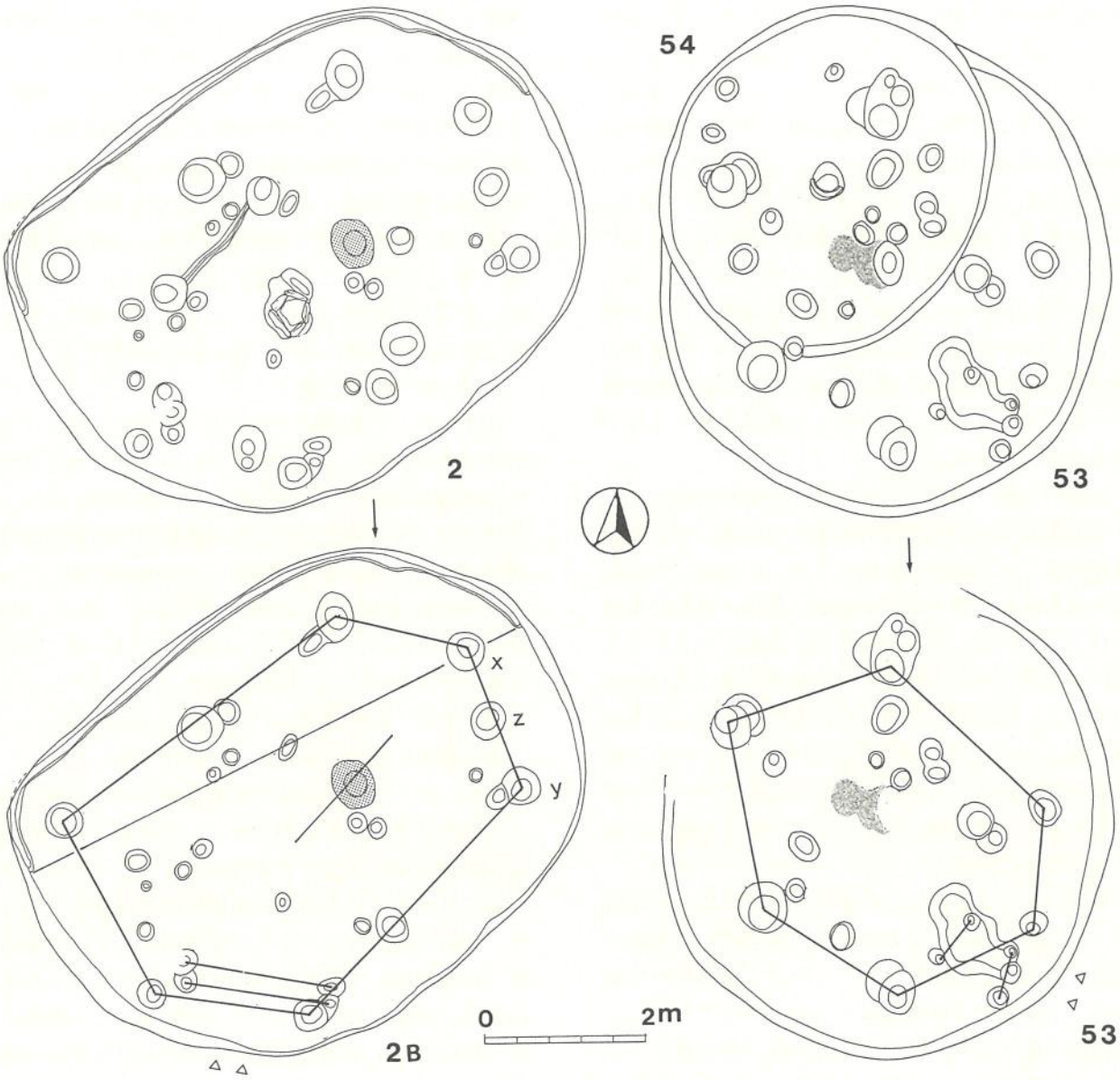

図6　リーダーの家（滑坂）

ではないが、炉石が存在していた痕跡は確認されていないようである。そして多摩ニュータウン446の場合には2人のリーダーの家は共に石の炉が造られていることを考慮すると、住居址2Bの炉は地床炉であるので、この住居址の炉も地床炉ではないかと推測される。特に入口の造作が注目される。南側の主柱穴の中間に細長い窪みを掘って、対の小柱穴を2組設けている。

ところで私が選び出した4軒の家―多摩ニュータウン446の住居6と7、滑坂の住居2Bと53は本当にリーダーの家であろうか。それぞれの集落では規模（＝床面積の広さ）で1番目と2番目の家がリーダーの家ではないかという前提の下で4軒の住居址の分析を行ってきた。この前提が正しいか検証する必要がある。2つの集落址―多摩ニュータウン446と滑坂は直線距離にして7km離れている。同じ地域に存在する以上、選出した4軒の家がリーダーの所有家屋であったならば、設計上の共通点を見出せる可能性がある。

最大の家：多摩NT446住居7と滑坂住居2B

どちらも楕円形のプランを有していて、長径は共に7mを超える。家の広さに比例して主柱穴の数も多い。床面積は張り出し部（住居7）を除けば、殆ど同じになる。南側に造られている入口に特徴があり、住居7は主柱穴が2個接して2本組柱になる。住居2Bは小柱穴ではあるが、やはり接合して主柱と

は別に細い２本組柱で入口を造っている。又、造作の仕方は異なるものの、家の奥の北西側に３分の１程度居住空間を仕切っているらしい。主柱穴を結ぶと六角形を引き伸ばした形になり、炉は中軸線上にある。主柱穴で注目されるのは、奥壁際の２個の主柱穴x, yの中間に主柱穴ｚが存在することである。この主柱穴ｚは建築上不要と思われるので、ここに立てられていた柱は非実用的なものであろう。場所は家の奥の向かって右側になる。私は祖先崇拝で建築された家（図12）では奥壁寄りの柱の１つを２本組み柱にしているのと同じ観念で設けられた柱ではないかと考えている。ともかく主柱は８本＋１本の９本ということになろう。

２番目の家：多摩NT446住居６と滑坂住居53

共に直径６m前後の略円形をしている。住居53の北壁を推定して床面積を比べると、ほぼ同じになる。どちらも主柱穴は６個であるが、住居６は同じ集落の住居７と同様に入口の主柱が２本組になるよう主柱穴が２個余分に入口近くの主柱穴のすぐ傍に掘られている。南東側にある入口は両住居共対になる小柱穴が２か所あり、対の柱穴の間隔は数十cmと狭く造られていて、入口の幅はもう１人のリーダーが所有する楕円形の家の場合に比べて半分程度しかないのが特徴である。

最大の家と２番目に広い家をそれぞれ比べてみると、家の形や面積をはじめ入口の細部に至る迄家の設計に共通する部分が多い。このような事実からすると、上述した４軒の家がリーダーの家であるという推測は成り立ち、集落が双分組織で構成されていたという根拠になる。そして彼等の重要な方位観である北西―南東という方角を、居住空間の奥壁側（最大の家：北西）と入口の位置（２番目の家：南東）で確保するようリーダーの家が設計されているようである。入口と奥壁側は対照的な場所であるだけに注目される。

では神谷原のリーダーの家はどのようなものであろうか。神谷原には多摩ニュータウン446や滑坂で確認した家と同一設計の家は存在しない。恐らく同じ多摩地域内でもリーダーの家は何種類かあって、神谷原では別の設計に基づいてリーダーの家が建築されたのであろう。

ⅲ家の跡地での儀礼

この集落で儀礼が行なわれた家は１軒だけで、それは住居址55である。西北西の壁際にある主柱穴に胴部下半の土器を入れている。実測図によると柱穴の底面近くからの出土なので、家が廃絶されてから間もなく儀礼が執り行われたようである。この家は２回改築されていて、その中（住居址55A,B,C）で儀礼が行われた住居址55Aは規模が１番大きく、主柱穴は６個である。多摩ニュータウン446でも儀礼がなされた住居址のうち規模の大きい３軒は主柱穴が６個（住居址６）か９個（住居址7,28）で３の倍数（整数倍）になっている。しかしこの家は土器の炉である点が多摩ニユータウン446とは異なる。

ⅳリーダーの家と墓

図７で示した集落址でリーダーの２軒の家と２基の墓はその位置から判断すると、リーダーの１人である推定墓壙104の被葬者の家は住居53で、もう１人のリーダー（推定墓壙135の被葬者）の家屋は住居2Bということになるだろう。この集落においてリーダーの死後人々は、空間分割ライン（ラインＫ）を意識してそのラインに近づくようにリーダーの埋葬場所を決めている。具体的には

北の集団：推定墓壙104～分割ラインK―17m

南の集団：推定墓壙135～分割ラインK―15m

となる。そして祖先崇拝では生前住んでいた家があった場所を考慮するかのように、新築する家（住居42,54）の位置を決定したようである。

次にリーダー２人の墓の位置関係を確認しておこう。北側の集団のリーダーが生前暮らしていた家の跡（住居址53）と推定墓壙104を結んだラインの延長線及び南側の集団のリーダーが居住していた家の跡（住居址2B）と推定墓壙135を結んだラインの延長線はちょうど90度の角度差があることが分かる。「勝坂式期人の方位観」で述べたように２次元における90度の角度差は二項対立を意味しているので、南北２つの集団ではリーダーの墓の位置は二項対立を意識して決められたと言えよう。

ｅ社会組織

ⅰ社会組織

多摩ニュータウン446と滑坂の集落址を分析して分かったことは、今まで縄文時代の集落址を研究してきた多くの研究者が指摘していたとおり、集落は双分組織で構成されていたということになる。同時に存在した家の数は後で考えるとして、多摩ニュータウン446では北東と南西の集団は共に家の数が10軒で墓壙に葬られた人数も均衡している。滑坂では北の集団が７軒で、南の集団は６軒であり、両集団

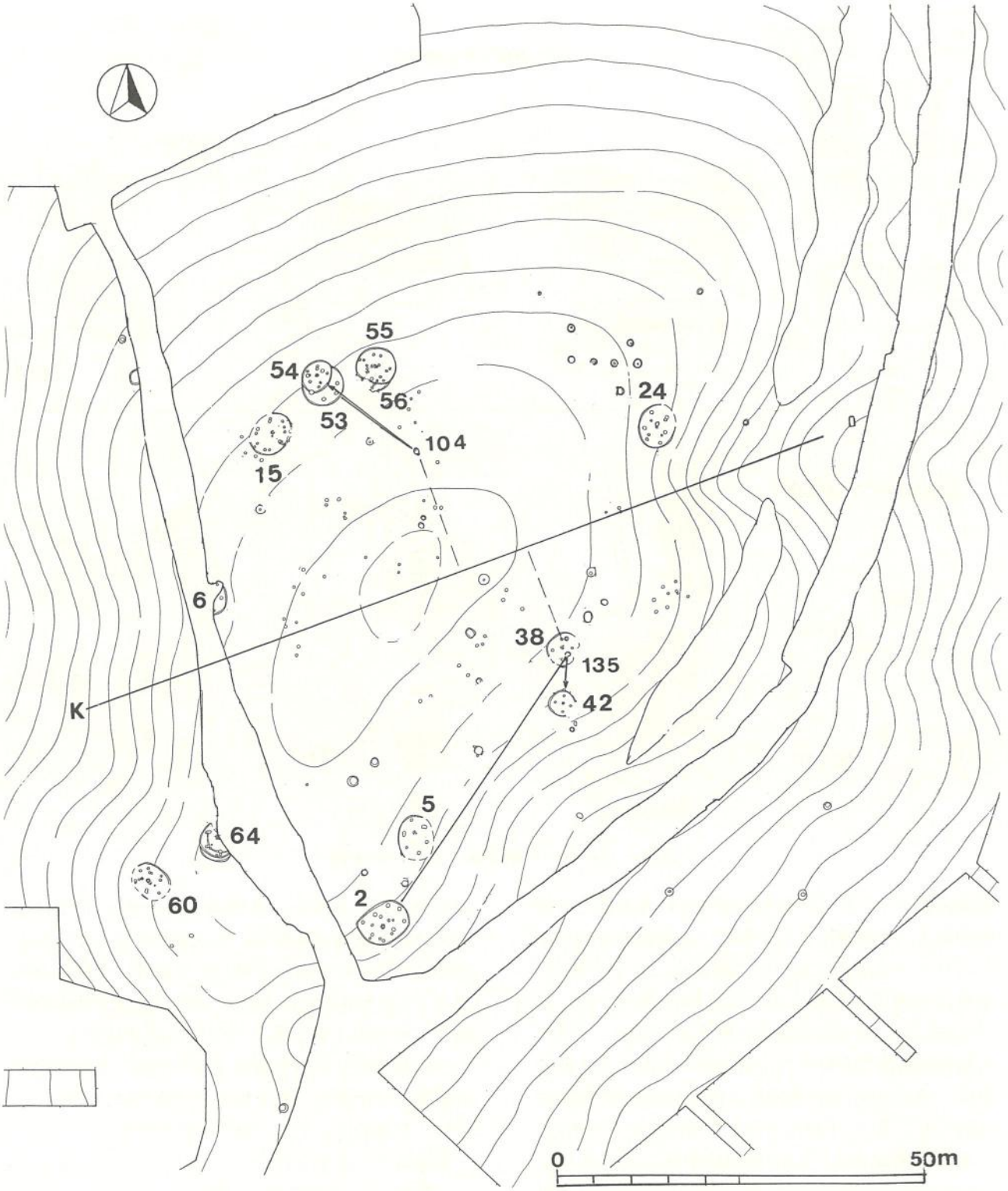

図７　リーダーの家と墓及び祖先崇拝で建築された家の位置関係（滑坂）

の構成員に大きな差はなかったようである。多摩ニュータウン471は集落址の一部が破壊されているため検討できなかったが、神谷原では北の集団と南の集団とでは人数のうえで不均衡が認められるらしく、勝坂１式期でも北の集団より南の集団の方が家の数は多くなっている。しかし神谷原の場合勝坂１式期迄は北の広場を囲むように家が分布しているが、勝坂２式期になると南側にも展開されるので、

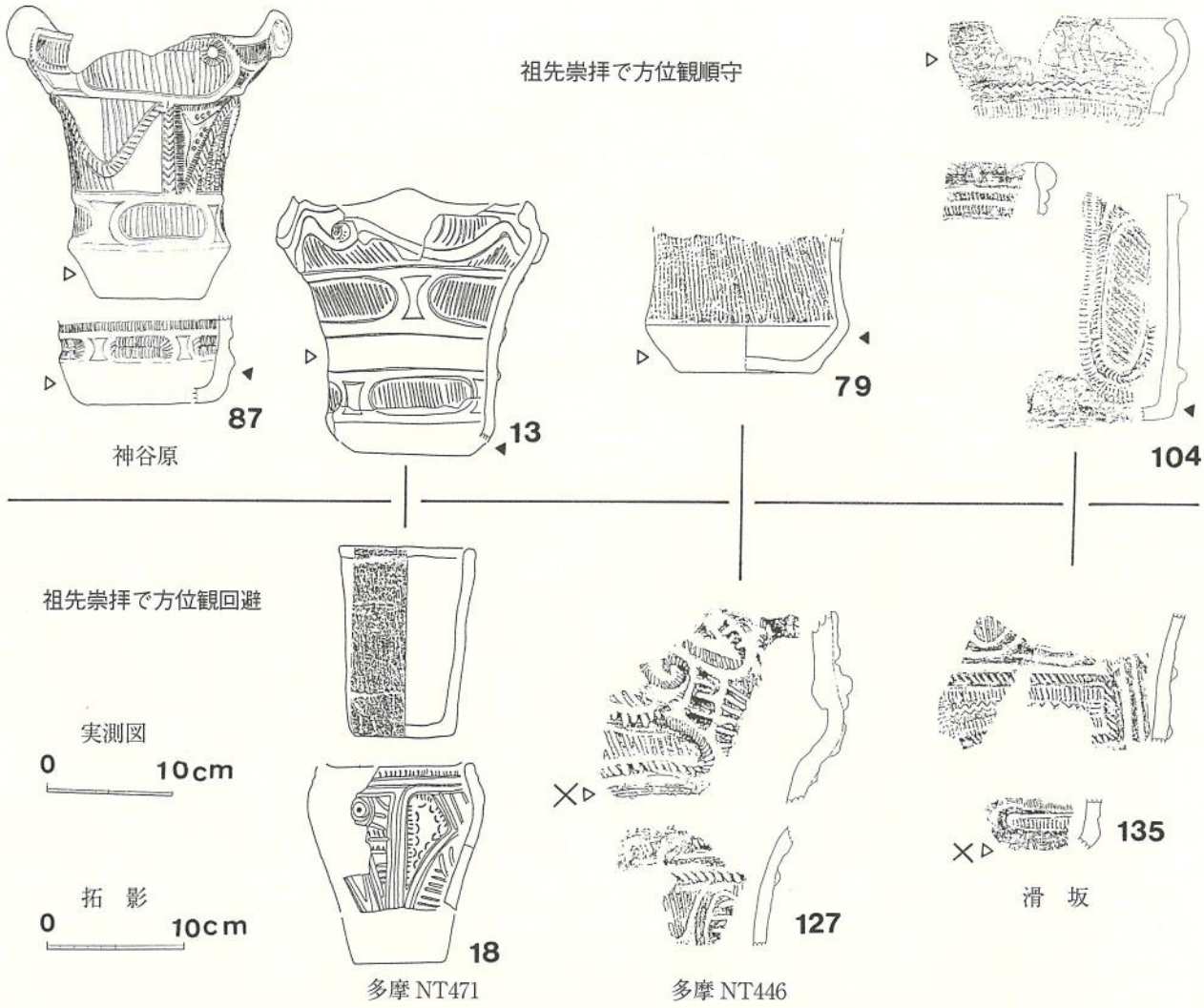

図８　リーダーの副葬品（土器）の比較

空間分割ラインはこの時期に南寄りに移された可能性がある。その理由として勝坂１式期迄の分割ライン（ラインA,T）に基づいて集落を二分した場合、７単位の楕円形区画文の土器を炉に持つ２軒の家（住居55,158）は南側の集団に属するものの、３単位の楕円形区画文を付けた土器の炉を保有する２軒の家は、住居110が北の集団に、住居142が南の集団に帰属してしまい、不自然な印象を受けるからである。

集落を構成する２つの集団は多摩ニュータウン446での儀礼行為の回数とその内容及び葬式の時死者を墓壙に埋葬した回数から判断すると、どちらの集団も冠婚葬祭は対等に行っていたようである。２つの集団が対等の関係を保っていたと判断できる状況証拠はリーダーの副葬品（土器については図８）にも見いだすことができる。つまり２人のリーダーの墓から出土した副葬品にはその内容において大きな差は認められない。多摩ニュータウン471では副葬品は完形土器（墓壙18）か底部を欠失しているものの完形に近い土器（墓壙13）であり、多摩ニュータウン446と滑坂では土器の一部（底部又は中型の破片）＋石器１個が各々の墓壙の副葬品であって、１つの集落で一方の墓壙には完形土器、そして他方の墓壙には土器の一部を供すという形にはなっていない。具体的に示すと、次のとおりである。

多摩ニュータウン471
　墓壙 13：完形に近い土器１
　墓壙 18：完形土器１＋大型破片１
多摩ニュータウン446
　墓壙 79：土器底部１＋石匙１
　墓壙127：土器片２＋磨石１
滑　坂
　推定墓壙104：土器片３＋打製石斧１

推定墓壙135：土器片２＋打製石斧１

ⅱ集団のアイデンティティ

集落を構成する２つの集団は、各々のアイデンティティをどのように保持していたのであろうか。アイデンティティはリーダーとの関わりにおいてのみ顕在化するようである。つまり２人のリーダーについては

生　前：家の建築―方位観の順守と回避
　　：家の形状―楕円形と円形
　　：家の方位―北西（奥壁側）と南東（入口部）
　　：家の主柱―９本と６本
　　：家の入口―広いと狭い
死直後：葬　式―土器の底部を使った儀礼の有無
　　：埋葬場所―中央広場内と居住区域内
　　：副葬品―土器の器面に無文帯の有無
　　：副葬品の位置―二項対立（多摩NT471）
死　後：祖先崇拝―方位観の順守と回避
　　：祖先崇拝の場所―中・長距離と至近距離

となる。家の建築については後で触れるとして、埋葬は掘った墓壙に葬られる訳であるが、竪穴住居が生前の家であるならば、遺体が置かれた墓壙は本人（被葬者であるリーダー）にとって死後の住まいに該当するし、祖先崇拝は新たな家屋の建築であるので、全て家と関連しているように見える。家との結びつきの明示として副葬品の土器の文様と同じ文様の付いた土器を祖先崇拝で新築した竪穴住居の炉に使用するという行為をしたと思われる。

２人のリーダーの副葬品である土器を図８に示したので、観察しておきたい。最初に土器のどの部位が副葬品として選ばれているか確認すると

祖先崇拝で方位観が順守されたリーダーの副葬品
　神谷原　　墓壙 87：完形土器＋土器底部
　多摩NT471墓壙 13：底部(底面)を除去した土器
　多摩NT446墓壙 79：土器底部
　滑坂　推定墓壙104：口縁部＋底部破片
祖先崇拝で方位観が回避されたリーダーの副葬品
　多摩NT471墓壙 18：完形土器＋大型の破片
　多摩NT446墓壙127：頸部近辺の破片
　滑坂　推定墓壙135：頸部＋底部付近の破片
　（滑坂では推定墓壙104の底部破片は底面が一部残存しているのに、推定墓壙135の底部付近の破片は底面に続く無文帯の上部で打ち欠かれている。）

となる。方位観に基づいて祖先崇拝が行なわれたリーダーの副葬品には土器の底部に強い関心が払われているようである。ところが方位観を避けて祖先崇拝が行なわれたリーダーの副葬品にはこのような意識は見当たらない。恐らく２人のリーダーのうち方位観と結びついて祖先崇拝が執り行われたリーダーには、葬式の時土器の底部に関わる葬送儀礼が存在したのであろう。土器の底部に関連する儀礼は葬送儀礼だけでなく、渡辺誠氏（1995,2001）によると全体の形が復原された勝坂式期（=藤内式期～井戸尻式期）の典型的な顔面装飾付き土器は18例あり、１点を除き全て底部を欠失していて、これは儀礼に使った後に底部を損壊したもので、その背景には死と再生の観念があるという。

次に副葬品の土器の文様について調べてみたい。２人のリーダーのうちどちらかの１人は無文帯が付く土器が副葬品に用いられる。

無文帯があるもの
　神谷原　　墓壙87：底部に無文帯が巡る。
　多摩NT471墓壙13：胴部に無文帯が巡る。
　多摩NT446墓壙79：底部に無文帯が巡る。
　滑坂　推定墓壙104：口縁部に無文帯が巡る。
無文帯が無いもの
　多摩NT471墓壙18：完形土器は無文土器。
　　：大型の破片は有文。
　多摩NT446墓壙127：土器片は有文。
　滑坂　推定墓壙135：土器片は有文。

無文帯が付かない土器片を詳細に見ておくと、多摩ニュータウン446の墓壙127より出土した頸部近辺の破片のうち大きい方はすぐ下に無文帯が続くその部分で打ち割って無文帯が除去されているし、滑坂の推定墓壙135から出土した底部付近の破片も底面へ繋がる無文帯の上部で打ち欠いて無文帯を取り除いている。葬式で遺体埋葬時におけるこのような副葬品の選別に、遺族がどのような意識を込めていたのか明確にはし得ない。では多摩ニュータウン446でリーダーの家と墓との関連はどのようであろうか。

北東の集団のリーダー：住居址６と墓壙127
　住居址６で行われた儀礼で用いられた用具（図５）は無文の手づくね土器で、墓壙127の副葬品（図８）は有文の土器片である。
南西の集団のリーダー：住居址７と墓壙79
　住居址７でなされた儀礼で使われた用具（図５）と墓壙79の副葬品（図８）は共に算盤玉状の土器の底部で、底面のすぐ上が無文帯になってい

る。

多摩ニュータウン446では使用された土器に見られる無文帯の有無が副葬品（死後）ばかりか生前の家の跡地での儀礼用具とも結びついていて、興味深い。又、家の跡地での儀礼は柱穴がかなり埋まってからなので、リーダーの葬式（前）→リーダーが生前住んでいた家の跡地での儀礼（後）という時間的な前後関係を認めることができるだろう。

4つの集落址の中で2人の墓に納められた副葬品の土器の位置が2基共記録されているのは多摩ニュータウン471（図9）だけであるが、墓壙13の副葬品（底部欠失の土器）は壙底の西北西の位置に置かれているのに、墓壙18では南南西（完形土器）と北北東（大型の破片）に置かれている。西北西と南南西という90度の角度差は二項対立を反映している。

2人のリーダーの埋葬場所は中央の広場内と居住区域内に分かれるが、それは死亡時の前後関係により決定されたようである。つまり先に死去した者は広場内に、そして後で亡くなった者は居住区域内に埋葬される。神谷原、多摩ニュータウン446、滑坂では次のようになっている。

・神谷原

北東の集団のリーダー（墓壙87の被葬者）が死んで広場内に葬られ、何年か経って祖先崇拝で住居110を建築したが、その後ほどなくしてまだ南の集団のリーダーが存命中に南北の両集団は引っ越した。このため南の集団のリーダーは墓が造られていない。

根拠：墓壙87の副葬品の土器及び住居110，142の炉体土器は神谷原では最終段階のもので、それ以降この地では人々が居住していない。

・多摩ニュータウン446

住居7に暮らしていた南西の集団のリーダーが死んで広場内で墓壙79に埋葬され、後に死去した住居6の居住者である北東の集団のリーダーは居住区域内で墓壙127に葬られた。

根拠：南西の集団ではリーダーが生活していた家（住居7）は改築がされてないことから、南西の集団のリーダーが死んだのは竪穴住居の耐用年数（安孫子1997a）である10～15年以内であるが、北東の集団ではリーダーが住んでいた家（住居6）は1回改築されているので、北東の集団のリーダーが死亡したのは10～15年以上経過してからである。

・滑　坂

2人のリーダーが住んでいた家のうち北の集団の家（住居53）は改築されてないが、南の集団の家（住居2）は1回改築されている。改築された家（住居2A）は規模が4m50cm×3m50cm（推定）と前の家（住居2B）に比べて大幅に狭くなっていて、改築後もリーダーがこの家に住んでいたとは考え難い。2人のリーダー共滑坂に移り住んで10～15年以内に死去したと思われる。

結局神谷原と多摩ニュータウン446から先に亡くなったリーダーは広場内に、後で死亡したリーダーは居住区域内に埋葬されたと判断されるので、滑坂では広場内に葬られた北の集団のリーダー（推定墓壙104の被葬者）が南の集団のリーダー（推定墓壙135の被葬者）より早く亡くなったと推測される。ではなぜ2人のリーダーを共に広場内に埋葬しないで、1人を居住区域内に葬ったのであろうか。もしかするとこのような葬式の方法を採ることで、集落の住民は自分達（居住区域＝生者の世界）と祖先（中央広場＝死者の世界）を一体化する為の役割を死去したリーダーに託していたのかも知れない。

祖先崇拝を行う場所を決定するに当たって、リーダーの埋葬場所が広場内か居住区域内かによって距離を異にする。具体的には図9のとおりで、計測値は次のようになる。（墓と家の一番近い壁迄）

広場内埋葬

神谷原　　墓壙 87→住居110：24m
多摩NT446墓壙 79→住居U2：72m
滑坂　推定墓壙104→住居54：15m

居住区域内埋葬

多摩NT471墓壙 13→住居35：7m
多摩NT446墓壙127→住居23：7m
滑坂　推定墓壙135→住居42：5m

広場内に埋葬された場合には祖先崇拝で建築する家の場所は離れているが、居住区域内に葬られた場合には墓から至近距離の所で祖先崇拝が行われて家が建てられる。その差は3倍以上である。（図2）

多摩ニュータウン446と滑坂でリーダーの家（図4,6）と祖先崇拝で建築された家（図12）は

＝リーダーの家＝＝祖先崇拝での家＝

多摩NT446：住居6（6本）―住居23（6本）
：住居7（9本）―住居U2（4本）

滑　　坂：住居2A（9本）―住居42（4本）
　　：住居53（6本）―住居54（5本）

で、その関係を確認しておくと

＝リーダーの家＝　　＝祖先崇拝での家＝

楕円形の家(主柱9本：広い)→主柱4本の家(狭い)

円形の家(主柱6本：狭い)→主柱5, 6本の家(広い)

となり、広い家（楕円形の家）に住んでいたリーダーは、祖先崇拝では狭い家（円形の家）で暮らしていたリーダーのものよりも狭い家が建てられる。これは2人のリーダーの生前での不平等（広い―狭い）を死後逆（狭い―広い）にすることで2人の対等性を保っていたのであろう。同様なことは後で記すように副葬品の数でも認められる。(「勝坂式期人の方位観」では事実把握に誤認があり、多摩ニュータウン446の住居址U2の主柱穴は4個であるのを報告書の写真図版で確認。)

2つの集団を表徴する2人のリーダー間に具現化された事象には生前（住んでいた家の形状、入口の幅）ばかりか死後（埋葬場所、葬式での儀礼の有無、埋葬場所と方位、副葬品にした土器の文様の選ばれ方、副葬品の位置、祖先崇拝の場所等）も二項対立である双分原理が明確に反映されている。このように勝坂式期には双分原理（文化構造）と双分組織（社会構造）の結びつきが極度に鮮明になる。双分原理は二元論の世界観の表れであるので、それを手懸りにして勝坂文化について理解を深めていくことが大切であろう。

ⅲ双分組織と春成秀爾氏の婚後居住規定説

縄文人が結婚後どちらの集団と共に住んだのかは、春成秀爾氏（1982,1999a）が抜歯の研究を通し明らかにしている。縄文人の抜歯には2つの型式があって、この2型式は出自の違い―集団出身者と婚入者の違いと解釈して婚後居住に関する規定について説明している。叉状研歯や副葬品のあり方から優

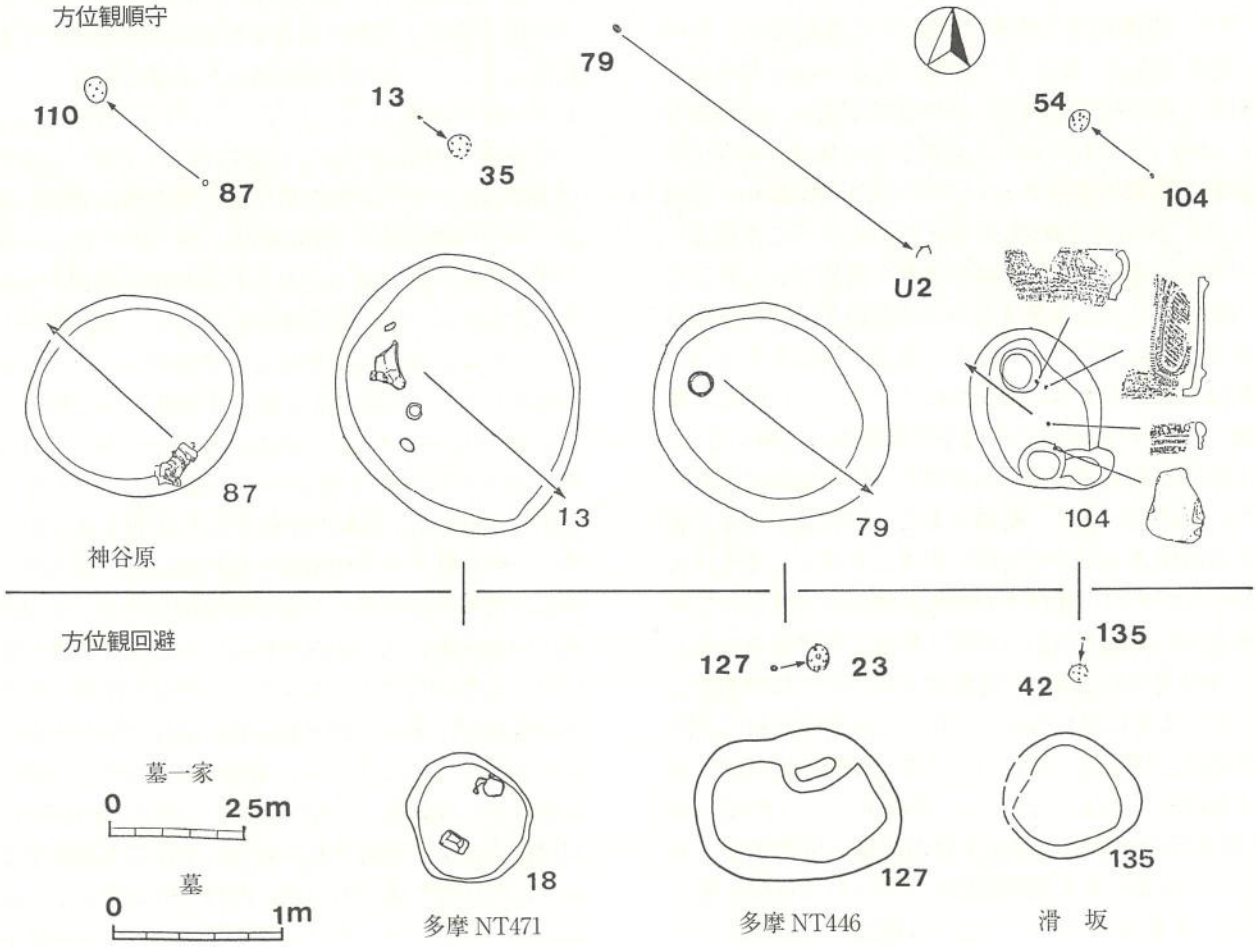

図9　リーダーの副葬品の位置と祖先崇拝で建築された家の方角

位な抜歯型式の人物を居住集団の出身者、劣位な抜歯型式の人物を婚入者と判断された。そして婚入者は死後集団出身者とは「墓地においても明瞭に区別されている」（1982）という。確かに集落が単一の組織で成り立っているという場合には、春成氏が考えられているように抜歯の２型式は「１居住集団・１住居の成員を二等分する原理として、その集団の出身者と婚入してきた者とに分かつ出自原理」(1982)になるであろう。しかしながら縄文時代の集落は（少なくとも中期では）双分組織で構成されているので、集団のアイデンティティーと結びつくと推測される抜歯型式の差異は集落を構成する２つの集団のそれぞれに対応していることもありえるはずである。小林達雄氏（1993）もこの点に関して「一集団内に、2C型と4I型の抜歯の二派が同居していたという可能性も否定しきれないのではないか。」と春成氏の説に疑問を呈し、「この（＝春成氏の）仮説の検証は依然として万全とはいいがたい。」と述べている。

又、関東地方の中期に盛行する廃屋墓は、その「竪穴（住居）に住んだ世帯、あるいはその出自を引くものが埋葬されていた可能性が高い。」（設楽博巳1999）とされている。東西２つの墓域が存在する勝坂２式期の多摩ニュータウン471では各々の墓域には、谷口氏（2002）も考えているように東西２つの集団の成員がそれぞれ分かれて埋葬されているものと推測され、集落成員の二分割原理はその集団出身者と婚入者という二分より集落を構成する２つの集団を二分する方が優先されているように映る。多摩ニュータウン471の場合や廃屋墓から判断すると、中期では婚入者も集団出身者と一緒の場所に葬られているようである。結婚するために外部から来た者が結婚によってその集団に正式な成員として受け入れられたのに、死後その所属集団から分離されて所属集団の墓地とは別の場所（墓地）に埋葬されるという春成氏の見解は、関東地方の中期では事実と合わないように思われる。しかしこれとは反対に大阪府国府の東墓地（前期）では男女の埋葬場所がそれぞれ離れていることから、丹羽佑一氏（2003）は「死者社会は血縁関係が夫婦の関係に優先する、あるいは少なくとも血縁関係が強調される社会であった。」と見なしている。どうも地域や時期の違いによって夫婦が一緒に埋葬される場合と分離されて埋葬される場合があったようである。春成氏が婚後居住規定説を導いた前提の妥当性については微妙であるので、より多角的に検討していきたい。

Ⅳ．方位観

ａ方位観の存否を確認する方法

縄文人が方位観を持っていたかどうか確認するには、彼等の行動様式を調べて、もし方位を意識した行動の痕跡を見いだせれば、縄文人は方位観を身に付けていたと見なすことができる。私は勝坂２式期の集落址を分析していて、多摩地域の４つの集落ではリーダー２人の祖先崇拝が行われ、そのうちの１人の祖先崇拝は、北西―南東という方角を念頭においていたことに気づいた。もし縄文人の祖先崇拝が彼等の方位観に基づいて執り行われていたとするならば、勝坂２式期以外の時期でも同様なことが確認されなければならない。そこでここでは新たに後期の事例を取り上げる。又、勝坂２式期の集落では実際に祖先崇拝が行われた根拠も明示したいと思う。その前に勝坂２式期の集落で祖先崇拝以外に方位観に則ってどのような行動があったか確認する。

ｂリーダーの家

リーダーの家については既に検討したが、ここでは多摩ニュータウン72の集落址（丹野雅人1999）のリーダーの家の跡を図10に示し、見ておきたい。リーダーの家の跡と見なされる住居址62は規模が６ｍ×（5m50cm）で、南西側が張り出し、不整円形を呈している。東側の壁を推定して多摩ニュータウン446のリーダーの家の跡である住居址６と比較すると、家の広さは同じ位であることが分かる。入口に対になる小柱穴が２組あって、多摩ニュータウン446の住居址６、滑坂の住居址53と共通するばかりか、この小柱穴の間の床面を楕円形に掘り窪めている点は滑坂のリーダーの家の跡に酷似する。入口が狭いのと南東に入口が造られていることも共通している。改築が行なわれていて、６個の主柱穴のうち入口の右側にある主柱穴ｈ以外の主柱穴はわずかながら位置をずらしている。多摩ニュータウン446の住居址６でも改築した時に南側の主柱穴（主柱穴ｈ）だけはそのまま使用されている。主柱穴を連結するように間仕切り溝が巡るが、南西の所は溝でなく段になっている。リーダーの家が建築された時の様子を知るために、改築時にずらされなかった主柱穴ｈを基点としてそれぞれの住居址を重ねてみよう。

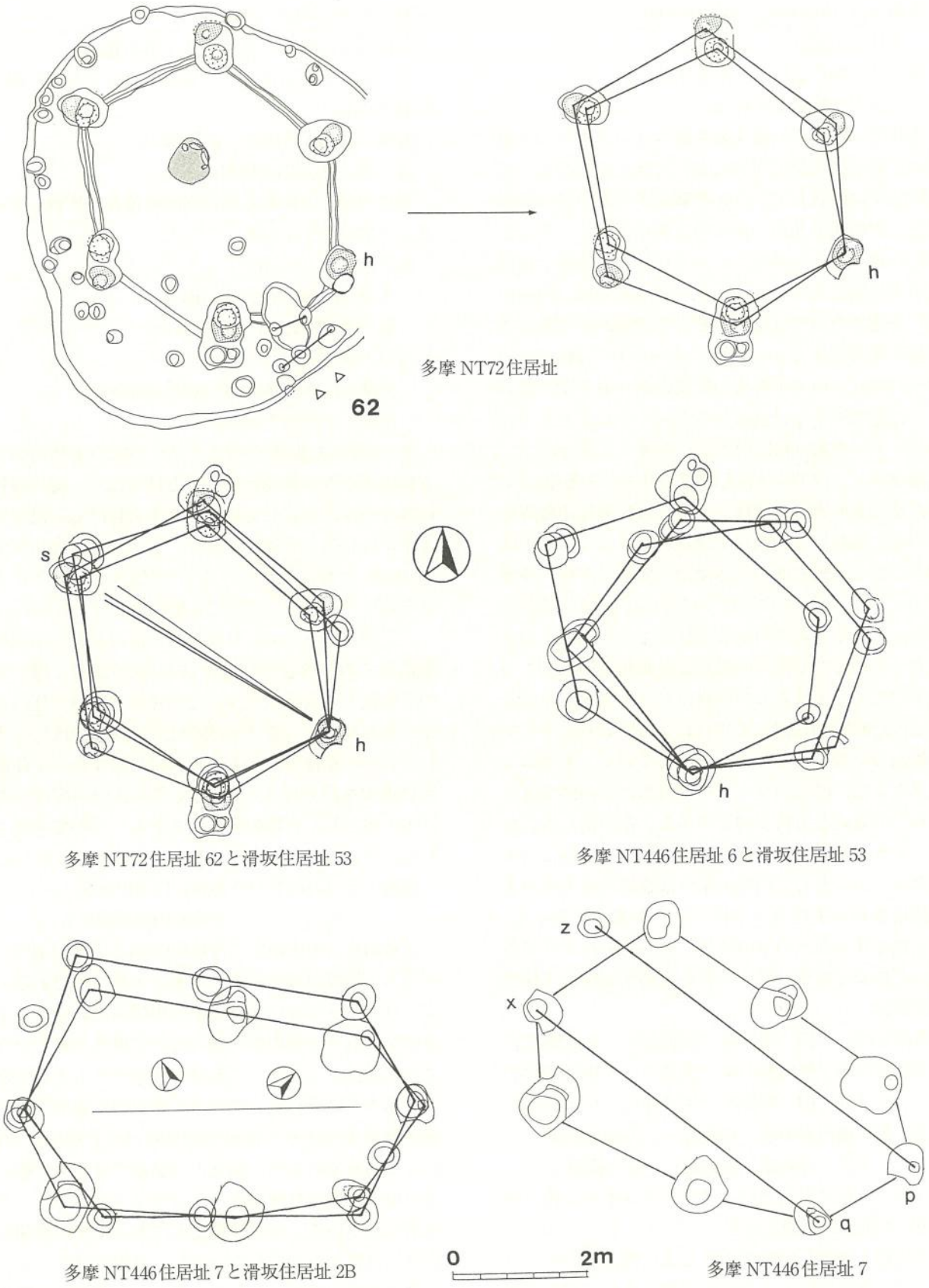

図10　リーダーの家の主柱穴の配置と方位観 の方角

多摩NT72住居址62と滑坂住居址53：
主柱穴の配置は一致する。
多摩NT446住居址６と滑坂住居址53：
主柱穴の配置はずれる。

主柱穴の配置が一致する多摩ニュータウン72と滑坂の２軒の住居址で主柱穴ｈに対向する主柱穴（主柱穴ｓ）に注目して、この２個の主柱穴を結んでみると、直線shは北西―南東の方角を示していることが分かる。そこで多摩ニュータウン72と滑坂では彼等の方位観に基づいてリーダーの１軒の家（円形の家）を建てたのではないかという推測が生じる。この推測を肯定するには多摩ニュータウン446のリーダーの家について主柱穴の配置のあり方をが、同じように説明できなければならない。そこでもう１人のリーダーの家（楕円形の家）を調べてみたい。

多摩ニュータウン446と滑坂のリーダーが住んでいた楕円形の家の跡では、主柱穴の配置は中軸線を合わせて重ねると、図10下段左のようになる。中軸線上にある主柱穴間の長さは殆ど変わらない。多摩ニュータウン446の住居址７について観察すると次のようになる。非実用的な主柱穴ｚと中軸線上の主柱穴ｐを結んでできた直線zpは中軸線上のもう１つの主柱穴ｘと主柱穴ｐの南西にある主柱穴ｑを結んでできた直線xqに対して平行になっている。そして直線zpは北西―南東の方角を示していて、多摩ニュータウン72、滑坂のリーダーの円形の家の跡で確認された直線shと方角が同じであることが明らかになる。どうやら楕円形の家では非実用的な主柱穴（主柱穴ｚ）が、そして円形の家では改築の時もそのまま使用される主柱穴（主柱穴ｈ）が基点になって、方位観をリーダーの家の建築に用いていたようである。このようにリーダーの家を建築する時、主柱穴の配置は

多摩NT72　：円　形の家（住居62）― 方位観順守
多摩NT446：楕円形の家（住居７）― 方位観順守
　　：円　形の家（住居６）― 方位観回避
滑　坂：楕円形の家（住居2B）― 方位観回避
　　：円　形の家（住居53）― 方位観順守

となる。これに祖先崇拝の時建築する家の位置（図3,7,9）の決め方を加えると

・方位観を順守して建てられた家に住んでいたリーダーは、祖先崇拝でも方位観が順守されて祖先崇拝をする場所が決められる。

多摩NT446：住居７―住居U2
滑　坂：住居53―住居54

・方位観を回避して建築された家で暮らしていたリーダーは、祖先崇拝を行う場所の決定でも方位観が回避される。

多摩NT446：住居６―住居23
滑　坂：住居2B―住居42

次に中軸線上にある主柱穴間の長さを比較してみると、次のようになる。

楕円形の家（x―p）
多摩NT446住居７：6m10cm
滑　坂　住居2B：5m86cm
円形の家（s―h）
多摩NT72住居62：4m40cm, 4m60cm
滑坂　住居53：4m68cm

数km離れた集落でのリーダーの家の主柱間の長さの差異が５％程度ということはやはり、縄文時代にスケールが存在していたことを裏付ける。尺度の１単位は17cm（池谷信之2000）とも35cm（藤田富士夫1999）とも言われているが、主柱穴間の長さにそれぞれの尺度を当てはめても整数倍にはならない。

三上徹也氏（1993）は神谷原、滑坂を含む中期の集落址で炉の形態の分類を試み、炉の設置に際しての労働投下の大小（多少）と調理機能の効率性の大小（良し悪し）で炉を優勢炉と劣勢炉に分け、「それぞれの炉を持つ住居も、それに対応する形で住居間に優劣を認め得る。」として竪穴住居の配置のあり方を検討し、当時の居住システムについて考究された。三上氏の考えをリーダーの家に当てはめると

優勢の家（石の炉）：多摩NT72住居62
　　：多摩NT446住居6, 7
劣勢の家（地床炉）：滑坂住居2A,53（53は推定）

となる。滑坂ではリーダーの家は劣勢の家であるのに、リーダーでない人々の家の炉は主に石の炉、土器の炉、石＋土器の炉を持っていて優勢の家ということになってしまう。これはどう考えても正しくないであろう。現代人（研究者）が炉の形態の差異を優劣と関係づけるのは科学的思考（＝合理的思考）による判断であって、縄文人の思考では炉の形態の違いは全く別の判断基準によってなされていたことを暗示している。つまり縄文人にとって炉の形態の差異には優劣が存在しないから、滑坂ではリーダーの家の炉を地床炉にしたのであろう。三上氏の研究は導入の前提の設定に問題がある。

次に主柱穴の数について触れておきたい。小林達

雄氏（1996）によると「勝坂式土器様式は、とくに3を特別視してい」て、勝坂式期人にとって3は聖数であるという。リーダーの家では主柱の数は円形の家が6本、楕円形の家が9本であり、共に3の整数倍になっている。特に楕円形の家では本来8本柱の主柱で家が建つのに、あえてもう1本主柱を付け加えて9本にしている。小林氏は「特別な意味を持つ」聖数3とのかかわりから、6を「3の倍数としての意義を有するものと理解される。」と述べていて、注目される。では9はどうであろうか。

c 数の認識

ついでに勝坂式期人が数をどのように認識していたか考えてみよう。まず今まで記してきたことから6と関連する部分を再録する。

・多摩ニュータウン446では家の跡地で儀礼が6回行なわれたが、そのうちの1回は儀礼の内容の一部を変えている。

・多摩ニュータウン72、同446では主柱穴6個のリーダーの家（円形の家）を改築する時、5個の主柱穴は位置を少しずらしている。

・多摩ニュータウン72にある円形のリーダーの家では6個の主柱穴を連結して間仕切り溝が存在するが、1か所だけは溝でなく段になっている。

・滑坂では楕円形のリーダーの家（住居2B）を改築して建てた家（住居2A）は主柱穴が6個であるが、主柱穴間に間仕切り溝は1か所しか存在しない。

これらの事実からすると勝坂式期人は6を6＝1＋1＋1＋1＋1＋1ではなくて、6＝5＋1として表示していたのようである。多摩ニュータウン446と滑坂に存在していた楕円形のリーダーの家では8個の主柱穴の配置にもう1個主柱穴（主柱穴z）を付け加えて主柱穴を9個にしている。つまり9は9＝8＋1という形になっている。3は勝坂式土器の文様に表示されていることが多く、3のあり方を調べてみると3は3＝1＋1＋1として存在せずに3＝2＋1（「勝坂式土器＝3＝2＋1—ハケ遺跡の土器の理解のために」『ハケ遺跡C地区』　埼玉県上福岡市ハケ遺跡調査会1979）として描かれている。3, 6, 9の数に関してはどうも1をプラスしてその数が成り立っているように思える。土器の文様の観察からすると、4は4＝3（2＋1）＋1、5は5＝3（2＋1）＋2となっている。2は2＝1＋1であるが、2を形成するそれぞれの1は同一の1ではなく二つの1が二項対立を示すように描写されている。5が5＝4＋1ではなく5＝3（2＋1）＋2として描き表されていることからすると、やはり小林氏が言われるように勝坂式期人が「3を特別視していた」のは間違いないだろう。中村大氏（2003）も小林氏の考えに賛同して「『3』には、特別な観念や意味が付加されていたと考えられ」、「小林氏の指摘どおり特別な意味を持つ聖数である可能性が高い。」としている。それにしてもなぜ勝坂式期人は数を表示する時、あえて二分して表現したのであろうか。

ここで勝坂式土器と数との関係についての研究を振り返ってみたい。小林達雄氏（1977）は勝坂式土器が「縄文土器一般にみられる4単位のほかに、3あるいは、6単位をとることが少なくな」く、「勝坂様式の3本指の表現とともに、3が呪術的な意味をもつマジックナンバーの一種と考えられる。」と言明された。

谷井彪氏は勝坂式土器の文様のあり方を分析し、「文様は二項対立により具体的姿を現わし、様々なレベルで具体化され」（1977）、「二重の反対称文をとるという特異な文様構造である」（1979）ことを明らかにした。そして「勝坂式が展開する中で文様が4単位として存在するのではなく、一旦2単位に還元し、それに改めて変形を加えることによって3単位を作り出している」（1979）と述べ、「内在する」「2単位と3単位の関係」から世界観は「全面的な二元論も三元論もあり得ず、両者の関係性の上に立」ち、「社会組織では一方的な双分的組織は存在せず、三分組織を基層に、二元論的世界観が個々それぞれに具体化されている」（1979）と考えられた。しかしながら土器の単位数の表現形態をそのまま社会構造（社会組織）と文化構造（世界観）に当てはめるのは無理があるようで、近年豊富な集落址の調査事例の増加によって中期では三分組織は存在しないことが判明しつつある。それにしても三元論の世界観とは具体的にどのようなものであろうか。ともかく元々言語学の用語であった二項対立が文化人類学への波及を経て考古学—縄文文化研究に導入された意義は極めて大きい。

私の「勝坂式土器＝3＝2＋1」に対し鈴木敏昭氏（1983）は「（嶋崎）氏の方法には土器の実態を把（捉）えるうえで重大な欠陥があると指摘」し、「（嶋崎）氏の文様分析においては、各文様相互の関係、および配置関係に全く顧慮されていない」「為に嶋崎氏の模式図には各単位文様の配置がえが恣意

的に実施されたと判断せざるをえ」なく、「実態としての土器の認識を混乱させている」と記している。私が「勝坂式土器＝3＝２＋１」で行ったのは、単位文の配置のあり方（器面の文様割付）を調べようとしたというよりも、単位文を中心とした文様に土器製作者が何を表示しようとしたか知りたいと思ったのである。つまり勝坂式土器では文様に３を表示することが多く見受けられ、表示された３は３＝２＋１という形になるというのが私の結論となる。鈴木氏の批判は私の意図を誤解しているようである。

笹森健一氏（1985）は称名寺式土器を分析して、文様単位の４単位は４＝３＋１で、その３は３＝２＋１になるという私の「解析の数式は、谷井氏の『二重の反対称文』の具体化された表現であると考えて」、「おそらく１つの土器から別の、最低２つの土器を生成する論理をもって結びつくのである。すなわち、１つの土器から反対称的な偶数の土器をつくることであり、全体で奇数の土器をつくる方法でもある。これは、最も基本となる『家族』の基本的関係に符合されるのである。」としている。しかしこのような数の表示方法はすぐ後で述べるように、リーダーの副葬品でも確認できるうえ、滑坂の推定墓壙104の副葬品の組み合わせは笹森氏が分析対象とした４単位の土器に見られる文様構成のあり方と同じであり、土器の施文に限定されている訳ではなく、土器の施文とは違って副葬品の組み合わせでは「生成する」物は何もないはずである。これと同じことは多摩ニュータウン446のリーダーの家でも確認される。円形のリーダーの家の跡―住居址６（図４）の石の炉に注目すると、炉にかかっているラインのうち４本の平行ラインでは１本だけ柱穴は壁際にあるが、残りの３本は一方の柱穴を内側にずらすことで、４＝３（移動：内側）＋１（原位置：壁際）にしている。この３本のラインは炉を意識してわざわざ柱穴を配置したのであろう。３である３本のラインは小さい柱穴―大きい柱穴の組み合わせが２本、大きい柱穴―大きい柱穴の組み合わせが１本となっていて、３は３＝２＋１に二分され、結局４＝３（２＋１）＋１になる。壁柱穴の配置について見ると、壁柱穴は４方向に対応しているが、そのうちの３方向はラインが３本で、入口―奥壁方向と同じ方向だけはラインが５本になっている。つまり４＝３（ラインが３本の方向）＋１（ラインが５本ある方向）となる。そして３本ラインの３か所の方向は、どの３本のラインも１本だけはラインの長さが短くなるように、壁柱穴の１個を内側に移している。それで３方向で確認されている３本のラインはどれも３＝２（長い）＋１（短い）になる。又、３方向で確認された短い１本のラインは右側の壁柱穴を大きく内側にずらしているのが２例で、左側の壁柱穴を少し内側に移しているのが１例というように二分される。つまり４方向の壁柱穴の配置は４＝３（２＋１）＋１となる。この３本のラインで分割された居住空間を見ると、短いラインがない方が居住空間をバランス良く分割しているように映り、あえて３＝２＋１を表示するために短いラインを付け加えたのではないかという感じを受ける。ともかくこの家は勝坂式土器の多くが文様で４＝３（２＋１）＋１又は３＝２＋１を表示しているのと同様に、家の設計段階で柱穴の配置の決定を通して４＝３（２＋１）＋１を表示している。複数の文化要素に見受けられる事象から思いをめぐらすと、４単位の文様のあり方が製作する土器の数量を反映しているという笹森氏の考えには疑問が湧いてくる。

ではリーダーの副葬品（土器については図８）の数を確認すると

神谷原墓壙87：2＝１（完形土器）＋１（土器底部）
多摩NT471墓壙13：1＝１（完形に近い土器）
墓壙18：2＝１（完形土器）＋１（土器片）
多摩NT446墓壙 79：２＝１（土器底部）＋１（石器）
墓壙127：３＝２（土器片）＋１（石器）
滑坂　推定墓壙104：４＝３（土器片）＋１（石器）
推定墓壙135：３＝２（土器片）＋１（石器）

になる。２は２＝１＋１であるものの神谷原の墓壙87と多摩ニュータウン471の墓壙18では一方の１は完形土器で他方の１は土器の部分（底部又は大型の破片）であり、多摩ニユータウン446の墓壙79では一方の１が土器の底部で他方の１は石器となっている。このようにリーダーの副葬品でも２を形作る１は同等ではない。又、３が３＝１＋１＋１でなく３＝２＋１（多摩ニュータウン446墓壙127、滑坂推定墓壙135）になることや４が４＝３＋１（滑坂推定墓壙104）になっていることは、土器の文様に見受けられる表示形態と合致している。滑坂の推定墓壙104の副葬品については、4＝３＋１の３が土器の文様と同様に二分されて、４＝３（２＋１）＋１になるのか問題になる。この墓壙の３個の土器片は

3＝2（口縁部）＋1（底部）である。口縁部は土器の最上部であり、底部は最下部に相当するので、3＝2＋1の2と1には上と下という二項対立が認められる。このことから滑坂の推定墓壙104の副葬品では4＝3（2＋1）＋1になっているのが分かる。ともかく勝坂式期人の数の表示方法は不均等分割を特徴としている。3の表示が土器の文様ばかりでなくリーダーの家や副葬品でも確認されるということは聖数3こそ勝坂式期の文化を理解するうえでのキーワードであると言えるだろう。すでに2については2＝1＋1のそれぞれの1が同等でないのを指摘したが、残りの副葬品の2についても見ておきたい。多摩ニュータウン446の墓壙127の土器片、滑坂の推定墓壙104の口縁部破片、同推定墓壙135の土器片は同じ大きさの破片が選ばれずに、一方が大きく他方は小さな破片が用いられている。このように2は大（1）と小（1）という二項対立になっている。つまり聖数3は二項対立の重層構造という形で表現される。

次に再度リーダーの副葬品の数を見ておくと

多摩NT471：1個（墓壙13）—2個(墓壙18)

多摩NT446：2個（墓壙79）—3個(墓壙127)

滑　坂：3個（推定墓壙135）—4個(推定墓壙104)

であって、2人のリーダーに供した副葬品の数量は同じではなく、1人のリーダーが他のリーダーより1個多くなっている。リーダーの生前の家を確認すると、多摩ニュータウン446、滑坂では副葬品が1個多い墓壙に葬られたリーダーは円形の家（主柱6本）に住んでいて、副葬品の少ないリーダーは楕円形の家（主柱9本）が住まいということになる。家の広さは楕円形の家が円形の家より広いので、2人のリーダーの関係は

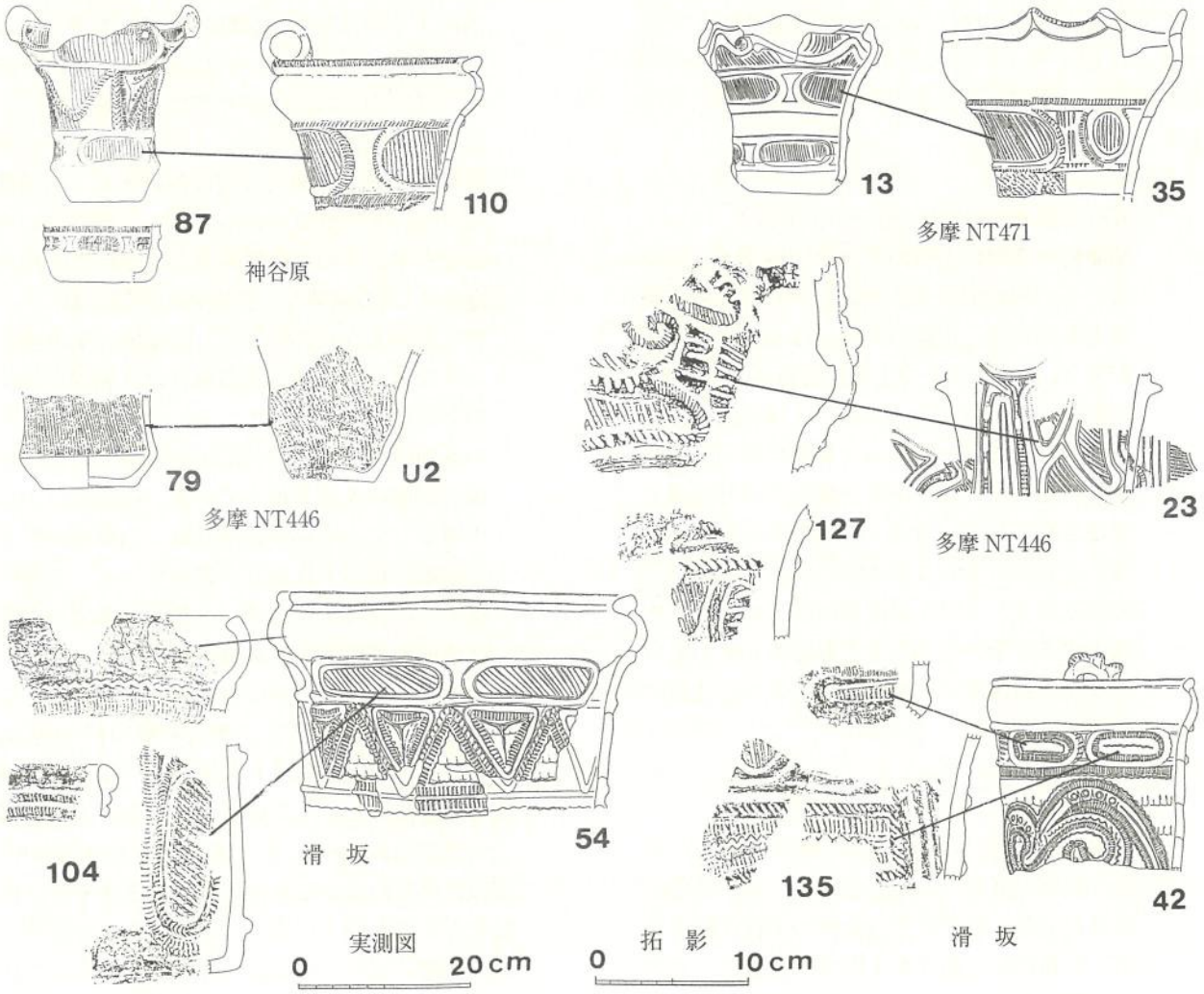

図11　リーダーの副葬品（左）と祖先崇拝で建築された家の炉体土器（右）との文様対比

広い（家：生前）→少ない（副葬品：死後）
狭い（家：生前）→多　い（副葬品：死後）

となる。これは集落の住民によって２人のリーダーが対等であることを確保するために生前の不平等（広い―狭い）を死後逆（少ない―多い）に変換しているのではないかと私は思っている。このような両者の対等性が多摩ニュータウン446では集落空間の均等分割にも反映されているのであろう。

そして数を代表する聖数３が３＝１＋１＋１（安定）ではなく３＝２＋１（不安定）として表示されることからすると、彼等の二元論の世界は静的世界というより動的世界であったらしいという推測が生まれる。

d勝坂２式期の祖先崇拝

勝坂２式期の祖先崇拝は集落を構成している２つの集団の各リーダーを対象として行われる。祖先崇拝の内容は家の新築で、リーダーの葬式の時副葬品として供した土器に付けられている文様と同じ文様が付く土器を家の炉として用いることに特徴がある。副葬品の土器と炉に使用された土器を図11に示して、説明する。

・神谷原

墓壙87の副葬品と住居110の炉体土器：

墓壙87の底面に土器の底部と口縁部の一部を欠くものの完形の土器が入れ子状になって検出されている。土器の底部には楕円形区画文が巡り、区画文の上で土器が切断されている。完形の土器は３つの文様帯（口縁部、胴部、底部）より成り、底部の文様帯は楕円形区画文が一巡していて、内部が縦位の平行沈線で充填されている。住居110の炉体土器は口縁部から頸部にかけての部分を利用していて、頸部に施されている楕円形区画文のすぐ下を横走する隆帯のところで土器をカットしている。楕円形区画文の内部は縦位の平行沈線の充填が見られる。

・多摩ニュータウン471

墓壙13の副葬品と住居35の炉体土器：

墓壙13の副葬品の土器は口縁部の一部を欠き、底部（底面）が除去されている。文様は頸部と底部に斜位に近い縦位の平行沈線を充填した楕円形区画文が１段ずつ配され、その間は無文帯になっている。住居35の炉体土器は頸部に楕円形と円形の区画文が巡り、区画内は平行沈線で充填されていて、この平行沈線は円形区画文では縦位であるものの、楕円形区画文では斜位に近い縦位である。

・多摩ニュータウン446

墓壙79の副葬品と住居U2の炉体土器：

墓壙79に副葬品として置かれていた土器は底部で、器面に縄文が施されている。住居U2の炉体土器は胴部下半の部分が使われ、地文として縄文が施文されている。

墓壙127の副葬品と住居23の炉体土器：

どちらも刻み目を持つ線（墓壙127は隆帯）で幾何学的な枠を作り、内部を斜位の平行沈線で充填している。

・滑　坂

推定墓壙104の副葬品と住居54の炉体土器：

推定墓壙104からは３個の土器片が出土している。そのうち中型の破片は２個で、１つは内湾する無文帯の口縁部破片で、もう１つは楕円形区画文が付けられた底部の破片である。区画内には右下がりの縄文が施されている。住居54の炉体土器は上部３分の１程が使われ、内湾する無文の口縁部のすぐ下の頸部には楕円形区画文が巡っている。区画文の内部は右下がりの平行沈線で充填されている。

推定墓壙135の副葬品と住居42の炉体土器：

推定墓壙135の副葬品の土器は区画文の残る２片であり、底部付近の破片は区画内を縦位の平行沈線で充填している。頸部辺りの破片の区画内は縦位の平行沈線を充填した後、横位の鋸歯状沈線を加えている。住居42は炉体土器として上半部が使用され、口縁部は無文で頸部に楕円形区画文が巡っている。左側の区画文の内部は空白で、右側の区画文の内部は横位の鋸歯状沈線が施されている。

滑坂では同じ文様の土器ではなく、似た文様の土器が使われている。推定墓壙104と住居54の場合は区画文の内部を充填している文様が縄文と平行沈線という違いが見られる。推定墓壙135と住居42の場合は推定墓壙135の区画文の内部に付加されている平行沈線を除去すると、住居42の文様と同じになる。滑坂については神谷原、多摩ニュータウン471、同446と異なって同一の文様でないものを無理に結び付けるのは科学性に欠けるという謗りを受けるかも知れな

い。しかしながら滑坂で確認された北西―南東という方角（住居址54と推定墓壙104を結んでできる直線）は図9でも明らかなように、ほかの3つの集落址での北西―南東という方角とのずれは小さい。そればかりか推定墓壙104と135に供せられた副葬品の土器の部位及び文様のあり方や副葬品の組み合わせはすでに記したとおり、ほかの3つの集落址での様相と一致している。これらのことから私の判断は恣意的ではないであろうと思っている。

副葬品の土器と炉体土器について文様の対比を行ってきたが、重要なのは各リーダーの副葬品である土器の文様と同じ文様が施文されている土器を炉に付設している家の跡は、各々の集落址で1軒ずつの計2軒しか存在しないことである。

次にリーダーの葬式で墓穴を掘って土器を供した時と、祖先崇拝で家を建てて炉に土器を設置した時との時間的な前後関係について検討したい。多摩ニュータウン471では住居址32（勝坂2b式古期）の真中に在る墓壙13は上部が貼床状になっている。墓壙13の副葬品の土器も勝坂2b式古期であり、住居址32は1回改築されているのに炉は非常に貧弱なので、墓壙13の設営はこの家の改築時かその後おこなわれたのであろう。墓壙13の副葬品の土器と対応する住居址35の炉体土器は勝坂2b式新期のものである。つまり墓壙13が造られた時には、まだ住居35は存在していなかったことになり、リーダーの葬式（墓壙13）→家の新築（住居35）という時間の経過を確認できる。つまり

勝坂2b式古期：

西側のリーダーの家の建築、居住

住居32の建築、居住→改築

西側のリーダーの死亡、埋葬

改築した住居32の居住

勝坂2b式新期：

西側のリーダーを対象とした祖先崇拝で住居35の建築、居住

となり、リーダーの家があった期間と祖先崇拝で建築した家が建っていた期間との間には、この両方の家が無かった期間―改築された住居32が存在した期間が挟まれていたことになる。そこで家の耐用年数を考慮して集落を構成していた家の数を推測してみると、多摩ニュータウン446では6軒で滑坂では4軒程度であろう。この数は小林謙一氏、黒尾氏の考えに近い。私は下記の4項目から多摩ニュータウン446では跡地で儀礼が行われた6軒の家が同時に建築されて、最初の集落が形成されたのではないかと考えている。

①リーダーの墓はそれぞれのリーダーの家とほかの家との中間点に造られている。

北東の集団

墓壙127―住居6：37m

墓壙127―住居13：37m

南西の集団

墓壙79―住居7：38m

墓壙79―住居1Aと5の中間：37.5m

②儀礼は最初から6回すると決められていたらしく、儀礼を行う都度そのうちの3回は儀礼の内容の細部をそれぞれ1つずつ変えている。そのため儀礼内容―儀礼の場所の範囲、儀礼の場所、儀礼用具のどれを取っても、6の表現形態である6回＝5回（共通）＋1回（変更）になる。

③家の跡地で行われた儀礼において下の2軒の家では同じ儀礼用具が使用されている。

＝北東の集団＝　＝南西の集団＝

住居6　―　住居5

住居13　―　住居7

④跡地で儀礼が行われた6軒の家はバランス良く配置されているように見える。どちらの集団も家々の間隔はリーダーでない家同士に対しリーダーの家とほかの家はほぼ3倍と4倍である。

北東の集団

住居13―住居28：24m

住居6―住居13：73.5m（約3倍）

住居6―住居28：99m（約4倍）

南西の集団

住居1A―住居5：18m

住居7―住居5：54m（3倍）

住居7―住居1A：74m（約4倍）

実際にこの6軒が同時に存在していたならば、多摩ニュータウン446の集落は極めて計画的に造られ、営まれていたことになる。そして北東のリーダーの住居6と住居13の間隔を南東のリーダーの住居7と住居1Aの間隔に合わせることで、両集団の一体感を保っていたのではないかと想像される。

話を再び祖先崇拝に戻すと、祖先崇拝を行う場所、つまり家を建築する場所については2人のリーダーのうち1人は彼等の方位観を順守して北西―南東の

方角と決められていて、もう１人のリーダーについては逆にその方角を避けていたといえる。又、祖先崇拝の場所を北西にするか南東にするかは、図９で明確のように墓壙内に置いた副葬品の土器の位置によって決定される。

「勝坂式期人の方位観」では多摩地域の勝坂２式期における祖先崇拝について具体的に記したつもりでいたが、佐々木藤雄氏から祖先崇拝（「『法事』）の評価も難しい問題を含んでいるように思われます。」というコメントをいただいたこともあって、前回は説明不足であったに違いないと反省し、ここでは勝坂２式期に祖先崇拝が行われたと私が信じている根拠を列挙しておきたい。

①方位観を順守して建築された家に住んでいたリーダーは、死後方位観を順守して祖先崇拝を行う場所が決められる。それとは反対に方位観を回避して建てられた家で暮らしていたリーダーは、死後方位観を回避して祖先崇拝をする場所が決定される。

②２人のリーダーの副葬品として供した土器の文様と同じ文様が施文されている土器を炉に使用している家（祖先崇拝で建築された竪穴住居）は各集落で２軒存在する。

③リーダーの墓２基と祖先崇拝で建てられた家２軒はそれぞれが離れて、二分割された集落空間の各々に存在する。（図２）

④広場内に埋葬されたリーダーに対する祖先崇拝の場所は墓から距離が離れているのに、居住区域内に葬られたリーダーを対象とした祖先崇拝は墓から至近距離の場所で行われる。（図２）

⑤祖先崇拝では２軒の家のうち１軒は墓から見て北西か南東の方角の場所に建築される。（図2, 9）

⑥祖先崇拝で家を北西方向に建てるか南東方向に建築するかはリーダーの墓に入れた副葬品の位

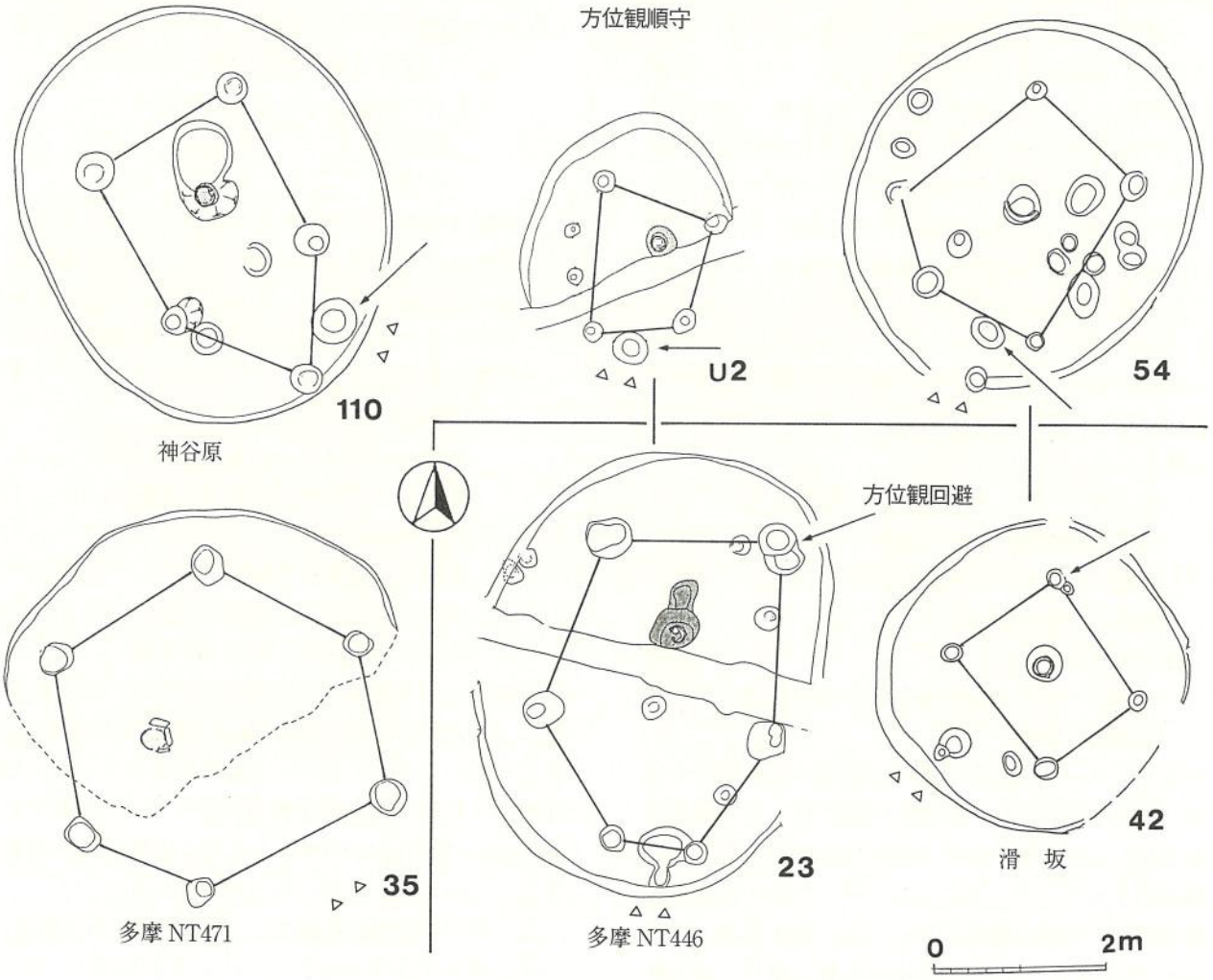

図12　リーダーの祖先崇拝で建築された家の比較

置と相関関係があり、副葬品の位置―リーダーの遺体―炉体土器となる。（図９）

⑦各集落で祖先崇拝の時採用される北西―南東という方角にはぶれが少ない。（図９）

⑧方位観を順守して祖先崇拝が行われたリーダーの副葬品の土器には遺族が底部に特段の意識を有していたらしく、葬式の時副葬品として供す前に底部に関わる葬送儀礼を行ったものと推測される。（図８）

⑨祖先崇拝で建築された家は入口の施設として床面を掘り窪めているが、祖先崇拝で方位観を順守して建築された家の入口は南側の主柱穴を結んでできた線の外側に接してこの施設を造っている。（図12）

神谷原住居址110, 多摩NT471住居址35?,
多摩NT446住居址U2, 滑坂住居址54
（多摩ニュータウン471の住居址35は南側の床面が消失し不明。）

⑩祖先崇拝で方位観を回避して建てられた家では入口の施設は主柱穴を結んでできた線には接しない。その代わり奥壁寄りの主柱穴の１個が側柱穴と接合し、２本組柱になる。（図12）

多摩NT446住居址23, 滑坂住居址42

⑪祖先崇拝で方位観を順守又は回避して建築された家の設計上共通にしている部分は⑨と⑩だが、入口と家の奥というように対照的である。

⑫勝坂２式期の祖先崇拝で基準になる北西―南東という方角（図９）は、後で述べるように後期の権現原（図13）で行われた祖先崇拝での方角と一致する。

①～⑫の事項は集落で暮らしていた人々の思考に基づく行動の結果であって、偶然に起こった事象であるとは思えない。祖先崇拝の存在を肯定してはじめて家や墓の状況に関して①～⑫に記述したとおり、ことごとく説明することが可能になる。

ついでに祖先崇拝での方位観の順守と回避について補足しておきたい。祖先崇拝で方位観を順守するとは、祖先崇拝を行う場所、つまり祖先崇拝で家を新築する場所を彼等の方位観である北西か南東に決めることであり、回避するとは北西及び南東の方角を避けて祖先崇拝の時家を建築することを指している。祖先崇拝の場所を決定するに際して方位観（北西―南東）を回避して建てられた家は全く方位観が無視されたという訳ではなく、家の建築時に方位観が考慮される。具体的に図12で奥壁寄りに在る２個接している柱穴に注目して、主柱穴―側柱穴の中心同士を結ぶと北西―南東になり、この２本組柱で方位観を明示しているようである。ちなみに側柱穴は主柱穴に比べて深さが浅い（多摩ニュータウン446住居址23）か大きさが小さい（滑坂住居址42）。これに対して祖先崇拝で方位観を順守して家の建築場所を決めた家の跡（神谷原住居址110、多摩ニュータウン471住居址35、同446住居址U2、滑坂住居址54）は、設計ではプランで判断する限り方位観に注意が払われていない。

e 後期の祖先崇拝

i 関東地方における後期の祖先崇拝

勝坂２式期の祖先崇拝が集団を統率していたリーダーのような特定の人物を対象にしているのとは違って、後期の祖先崇拝は多数の祖先を対象にしている。具体的には埋葬された祖先の遺体を掘り起こして、新たに掘った１基の墓穴に何人も合葬する。つまり祖先崇拝は複数の人数の祖先を再葬するという形をとる。このような合葬墓は設楽博巳氏（2001）によって集成されたものとその後の事例（菅谷通保2000）を加えると千葉県権現原（称名寺１式古期）、同県宮本台（堀之内１式末期）、同県古作（堀之内１式末期～２式初期）、同県祇園原（堀之内式期）、同県誉田高田（堀之内式期）、同県下太田（後期中葉）、茨城県中妻（堀之内２式期）があり、対象人員は３人から100人程度と幅広い。時期的には堀之内式期に盛行するようである。（上記の事例には一次葬の合葬墓も含む。宮本台と古作の時期は堀越正行2000a,b。設楽氏は古作の時期を加曽利B式期と推定。）このうち集落址の全域が調査されたのは権現原だけであるが、幸い権現原は初葬の場所（墓地）が確認されていて、後期の方位観を検討できる良好な資料となるで、ここでは権現原を取り上げたい。

ii 権現原の集落址

権現原（花輪宏・浅川裕之1987）は加曽利E4式期から堀之内式期にかけての集落址（図13）で、23軒の住居址より成る。集落址は遺構の遺存状態が悪く、堀越正行氏（2000c）によると「あと10数軒の住居が加わる」ものと考えられている。この集落址で特に注目されるのは二次葬（改葬）を行った合葬墓（改葬集団墓）が発見されている点である。この改葬集団墓については、権現原の発掘に参加された渡辺新氏（1991,2001）による詳細な研究があり、報告

書では知りえない知見をも明らかにしている。

改葬集団墓には18体が埋葬されていて、報告書では伴出遺物は「図示不能の土器細片」と記されているが、渡辺氏はこれらの土器片についてどれも称名寺１式古期であると述べている。改葬集団墓の南東30mから50m離れた所に２か所墓壙群がある。

墓壙群１：墓壙142～150

墓壙群２：墓壙174～179

渡辺氏によると墓壙群１からは人の歯と指の骨が、墓壙群２からは人の頭蓋骨の一部と歯が出土し

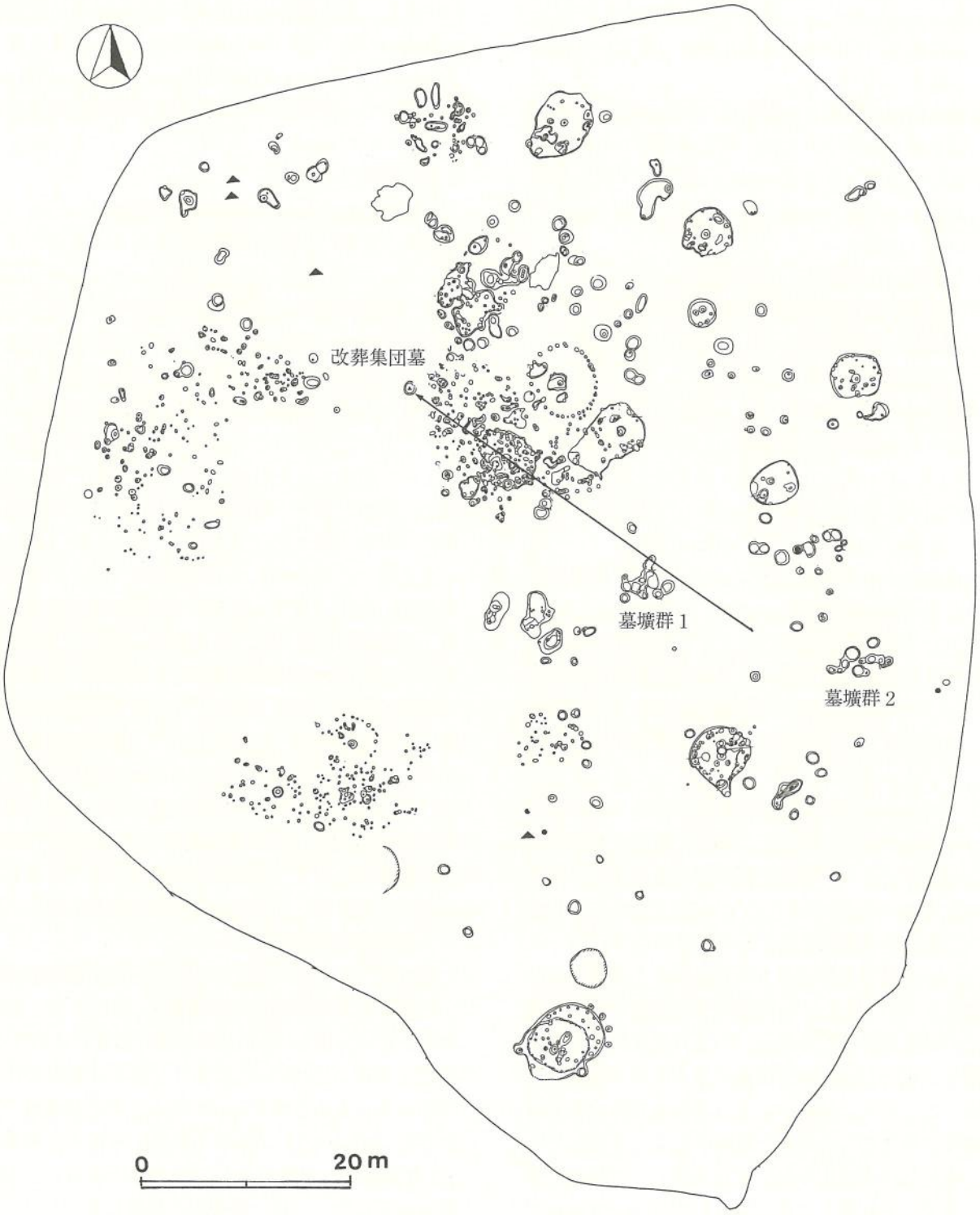

図13　権現原での祖先崇拝の場所とその方角（後期前葉）

ているという。土坑の機能を決定する極めて重要な事実にもかかわらず、不思議なことに報告書には人骨片が検出されたという記載はない。墓壙群のどの墓壙に人骨片が残存していのたか渡辺氏は明示していないので詳細は不明であるものの、墓壙は「全体的には撹乱が及んでい」て「掘り返したようで」（2001）あると指摘している。墓壙群２から検出された歯が改葬集団墓に葬られていたｈ号人骨に植立したことから、改葬集団墓に埋葬されている18体の人骨の初葬地はこの２つの墓壙群であるのが渡辺氏によって確認された。渡辺氏は墓壙群からいずれも加曽利E4式新期の土器片が数十個出土しているとしている。報告書に示された土器片の拓影によると、墓壙群のそれぞれの墓壙内からは加曽利E4式と称名寺式の土器片が混在して出土していて、堀之内１式のものも見られる。墓壙から出土した土器片は次のようになっている。

墓壙群１

墓壙145：加曽利E4式, 称名寺１式, 堀之内１式

墓壙150：加曽利E4式, 称名寺１式, 堀之内１式

墓壙群２

墓壙174：加曽利E4式, 称名寺１式

墓壙175：加曽利E4式, 称名寺１式

墓壙177：加曽利E4式, 称名寺１式

墓壙178：加曽利E4式, 称名寺１式

墓壙179：加曽利E4式, 称名寺１式

渡辺氏はこれらの墓壙群の時期は加曽利E4式新期で、称名寺１式古期に墓壙群の遺体を集団墓に改葬したとして、権現原に移り住んだ最初の集団の人口を推計している。しかし渡辺氏が明言しているとおり墓壙群２と同様に墓壙群１に葬られた祖先の遺体も改葬集団墓に移されたとするならば、墓壙群１から出土している堀之内１式土器の破片で判断すると、改葬した時期は堀之内１式期迄降ることもありえるだろう。

次に祖先崇拝の場所である改葬集団墓の位置を確認しておきたい。改葬集団墓は初葬地である２つの墓壙群の北西にあり、改葬集団墓と墓壙群1,2の中間点を結んでできた直線は北西―南東の方角を示していることが分かる。そればかりか権現原で得られた北西―南東という方角は多摩地域の勝坂２式期の集落址（神谷原、多摩ニュータウン471、同446、滑坂）で認められた北西―南東の方角と一致する。このことより北西―南東という方角は少なくても中期以降縄文人に方位観として保持され続けていたと判断できる。

ⅲ大湯環状列石

佐々木藤雄氏（2002b）によると大湯をはじめ環状列石の性格は配石下部に墓壙と推定される土坑が存在することから、葬送と祖先祭祀とが統合化された大規模記念物（モニュメント）とする見解が最も有力という。大湯の環状列石については今まで何人もの研究者によって取り上げられてきた中で、例えば春成秀爾氏（1999b）は墓地である環状列石に造られている日時計状特殊組石を権現原の改葬集団墓と同様に、改葬した合葬墓であろうと予想している。私にはこの特殊組石の下に合葬墓があるか分からないが、大湯環状列石を構成する中野堂と万座の環状列石では北西の部分に位置する日時計状特殊組石は環状列石に葬られている祖先に対して崇拝を行った場所ではないかと推測している。と言うのも私は死者と北西―南東という方角が結びつくものとしては今のところ祖先崇拝以外確認していないからである。佐々木氏が指摘している祖先祭祀の場や春成氏の予想も、換言すれば祖先崇拝が行われた場所ということになり、私の考えと一致する。

Ⅴ．縄文人の方位観

今まで記述してきたように、縄文人は確固たる方位観を持ち、特に北西―南東が彼等にとって重要な方角で、リーダーの家の建築や祖先崇拝の時その方位観に則って行動していた。縄文人の方位観については彼等の多様な行動様式の一つ一つを今後確認しながら、縄文人が方位に対してどのように認識していたか理解を深めていきたい。

祖先崇拝の目的を明確にするのは難しいけれど、勝坂２式期の祖先崇拝は家を新築するという行為であり、これは祖先崇拝の対象者であるリーダーが再度自分たちと一緒に暮らして欲しいという死者に対する再生願望ではではないかと私は思っている。それにしてもなぜ勝坂２式期にはリーダーだけが祖先崇拝の対象になったのであろうか。すでに記したようにリーダーこそ所属する集団のアイデンティティそのものであることから、リーダーの祖先崇拝はリーダーばかりかその所属集団の祖先全員を対象としたものとしての意味合いを併せ持っていたのであろう。

尚、この小文の内容は埼玉大学教養学部教養学科総合文化課程で履修した「人類文化史Ⅰ・Ⅱ」「文化人類学」「RACE AND HISTORY（C.Lévi-Strauss)」「文化哲学」「構造人類学」「文化構造論」「文化パターン論」「Essai sur le don(Marcel Mauss)」等の文化に関する一連の科目と「自然人類学」「記号論理学」「社会学」「日本民俗学」等の教科に拠っている。そのためこの小文は私にとって第二の卒業論文に該当する。

最後にこの場をお借りして私の考古学上の恩師にお礼を申し上げさせていただきたいと思います。小学生の頃直良信夫先生が書かれた本を読んで考古学に興味を持ったのが縁で、中学１年生の時私を早稲田大学の研究室に招いて貝塚の話をして下さった直良先生、ありがとうございました。今その日をまるで昨日のことのように思い出します。

深謝：

この小文を書くにあたって小林達雄氏には方位観説についてご教示を受けました。青森県三内丸山に関しては太田原潤氏に、山形県長者屋敷に関しては岩崎義信氏に不明点のお教えを得ました。又、櫛原功一氏、佐々木藤雄氏、谷口康浩氏、丹羽佑一氏、渡辺誠氏（五十音順）は論文の抜刷を恵与して下さり、土井義夫氏からは八王子市の報告書を贈与していただきましたので、そのいくつかを今回使用しました。特に谷口氏には氏が考えられている縄文時代の社会構造に関する資料解釈上の疑問点についての問い合わせに対して逐一丁寧で詳細なご説明を受けました。とりわけ佐々木藤雄氏からは「勝坂式期人の方位観」での問題点をご指摘いただき、非常に啓発されました。そして今回発表の場を提供して下さったうえ編集者の立場から献身的なご協力を賜った櫛原功一氏にも心より感謝しています。

挿図出典

挿図は全て加除筆をおこなっている。

図１　新藤康夫･小林奈緒美1982＋佐々木克典1988＋小薬一夫1993+櫛原功一1994＋千田利明1997＋安孫子昭二1997a,b

図２　新藤康夫･小林奈緒美1982＋佐々木克典1988＋小薬一夫1993+櫛原功一1994＋千田利明1997＋安孫子昭二1997a,b

図３　千田利明1997＋安孫子昭二1997a

図４　千田利明1997

図５　千田利明1997

図６　佐々木克典1988

図７　佐々木克典1988＋櫛原功一1994

図８　新藤康夫･小林奈緒美1982＋佐々木克典1988＋小薬一夫1993＋千田利明1997

図９　新藤康夫･小林奈緒美1982＋佐々木克典1988＋小薬一夫1993＋千田利明1997

図10　佐々木克典1988＋千田利明1997＋丹野雅人1999

図11　新藤康夫･小林奈緒美1982＋佐々木克典1988＋小薬一夫1993＋千田利明1997

図12　新藤康夫･小林奈緒美1982＋佐々木克典1988＋小薬一夫1993＋千田利明1997

図13　花輪宏・浅川裕之1987

参照文献

安孫子昭二　1997a「縄文中期集落の景観―多摩ニュータウンNo.446遺跡―」『研究論集XVI』　東京都教育文化財団･東京都埋蔵文化財センター

1997b「縄文中期集落の景観（二）―八王子市神谷原遺跡―」多摩考古第27号　多摩考古学研究会

池谷信之　2000「縄文時代の単位長『尺』」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』　東京堂出版

井戸尻考古館　2002『藤内遺跡出土品重要文化財指定記念展藤内』　富士見町教育委員会

稲野裕介　2002「岩手県北上市樺山遺跡」『縄文ランドスケープ』　有朋書院

今福利恵　2002a「山梨県牛石遺跡」『縄文ランドスケープ』有朋書院

2002b「長野県阿久遺跡」同上

岩崎陽一　1990『多摩ニュータウン遺跡　昭和63年度（第２分冊）』東京都埋蔵文化財センター調査報告第11集　東京都教育文化財団・東京都埋蔵文化財センター

岩崎義信　2002a『縄文人と巨大木柱―特別な意味合いの日』山形県長井市教育委員会

2002b「山形県長者屋敷遺跡」『縄文ランドスケープ』　有朋書院

太田原潤　2000「三内丸山遺跡の６本柱巨木柱列と二至二分」縄文時代第11号　縄文時代文化研究会

2001「三内丸山遺跡の六本柱は建物か」東アジアの古代文化106号　大和書房

2002a「記念物（モニュメント）―記念物と二至二分―」季刊考古学第80号　雄山閣出版

2002b「青森県大森勝山遺跡」『縄文ランドスケープ』　有朋書院

2003「三内丸山の６本柱巨木柱列と二至二分」『三内丸山縄文人の世界』週刊朝日百科36日本の歴史原始･古代⑥　朝日新聞社

岡田康博　1996『三内丸山Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書第205集　青森県教育委員会

小倉勝男　2002「縄文時代の天体」『縄文ランドスケープ』有朋書院

忍澤成視　2003「西ノ谷貝塚J57住居跡内貝層の調査」『西ノ谷貝塚』港北ニュータウン地域内文化財調査報告33　横浜市教育委員会
葛西　勵　2002「青森県太師森遺跡」『縄文ランドスケープ』有朋書院
櫛原功一　1994「縄文中期の環状集落と住居形態」『山梨考古学論集Ⅲ』　山梨考古学協会
熊谷常正　2002「岩手県門前貝塚」『縄文ランドスケープ』有朋書院
黒尾和久　2001「集落研究における『時』の問題―住居の重複・廃絶と同時存在住居の把握方法に関連させて―」『第1回研究集会発表要旨　縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会
児玉大成　2002「青森県小牧野遺跡」『縄文ランドスケープ』有朋書院
小林謙一　1998「1997年の縄文時代学界動向　集落・領域論」縄文時代第9号　縄文時代文化研究会
小林達雄　1977『日本原始美術大系1―縄文土器』　講談社
1993「縄文集団における二者の対立と合一性」『論苑考古学』　天山舎
1995「縄文時代の『自然の社会化』」『縄文時代における自然の社会化』季刊考古学・別冊6　雄山閣出版
1996『縄文人の世界』朝日選書887　朝日新聞社
1999a『縄文人の文化力』　新書館
1999b「縄文人の記念物」『山梨県史のしおり資料編2原始・古代2考古（遺構・遺物）』　山梨県教育委員会県史編さん室
1999c「縄文ランドスケープ」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要第14号』　秋田県埋蔵文化財センター
2000『縄文人追跡』　日本経済新聞社
2002a「縄文人の見た風景」『研究論集XIX』　東京都生涯学習文化財団・東京都埋蔵文化財センター
2002b「縄文ランドスケープ　自然的秩序からの独立と縄文的世界の形成」『縄文ランドスケープ』　有朋書院
2003「縄文ランドスケープと二至二分」『三内丸山縄文人の世界』週刊朝日百科36日本の歴史原始・古代⑥　朝日新聞社
小薬一夫　1993『多摩ニュータウン遺跡　平成3年度（第3分冊）』東京都埋蔵文化財センター調査報告第15集　東京都教育文化財団・東京都埋蔵文化財センター
1995「縄文中期の住居型式からみた集落の変遷と領域―多摩ニュータウンNo.471遺跡の事例検討から―」『縄文中期集落の新地平』　宇津木台地区考古学研究会
佐々木克典　1988『滑坂遺跡』南八王子地区遺跡調査報告4　八王子市南部地区遺跡調査会
佐々木藤雄　2001「環状列石と地域共同体」異貌第19号　共同体研究会
2002a「環状列石と環状周提墓―二つの階層墓論のためのノート―」異貌第20号　共同体研究会
2002b「環状列石と縄文式階層社会―中・後期の中部・関東・東北―」『縄文社会論（下）』　同成社
笹森健一　1985「縄文時代後期初頭の土器について」『貝塚山遺跡発掘調査報告―第2地点―』富士見市遺跡調査報告第24集　富士見市遺跡調査会
佐野一絵　2002「秋田県伊勢堂岱遺跡」『縄文ランドスケープ』　有朋書院
設楽博巳　1999「墓地と埋葬の意味」『imidas Special Issue 縄文世界の一万年』　集英社
2001「多人数集骨葬の検討」『シンポジウム　縄文人と貝塚　関東における埴輪生産と供給』　学生社
篠崎譲治　1999『七ツ塚遺跡5―七ツ塚遺跡発掘調査報告―』日野市埋蔵文化財発掘調査報告64　日野市東光寺上第1・第2土地区画整理組合
新藤康夫・小林奈緒美　1982『神谷原Ⅱ』　八王子資料刊行会
菅谷通保　2000「下太田貝塚」『千葉県の歴史　資料編考古1（旧石器・縄文時代）』県史シリーズ9　千葉県
鈴木敏昭　1983「縄文土器の施文構造に関する一考察―加曽利E式土器を媒介として（序）―」信濃第35巻第4号　信濃史学会
瀬川司男　2003「東和町環状列石を含む石造遺構群」月刊考古学ジャーナル第505号　ニュー・サイエンス社
千田利明　1997『多摩ニュータウン遺跡先行調査報告5』東京都埋蔵文化財センター調査報告第36集　東京都教育文化財団・東京都埋蔵文化財センター
大工原豊　1995「群馬県天神原遺跡」『縄文時代における自然の社会化』季刊考古学・別冊6　雄山閣出版
2002a「群馬県天神原遺跡」『縄文ランドスケープ』有朋書院
2002b「群馬県中野谷松原遺跡」同上
2002c「群馬県野村遺跡」同上
竹田　均　2000『代継・富士見台・西龍ヶ崎遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第90集　東京都生涯学習文化財団・東京都埋蔵文化財センター
谷井　彪　1977「勝坂式土器の文様構造について」埼玉考古第16号　埼玉考古学会
1979「縄文土器の単位とその意味（上）（下）」古代文化第31巻第2号・第3号　古代学協会
谷口康浩　1998a「環状集落形成論―縄文中期集落の分析を中心として―」古代文化第50巻第4号　古代学協会
1998b「縄文時代集落論の争点」国学院大学考古学資料館紀要第14輯　国学院大学考古学資料館
2002「環状集落と部族社会―前・中期の列島中央部―」『縄文社会論（上）』　同成社
丹野雅人　1999『多摩ニュータウン遺跡―No.72・795・796―』東京都埋蔵文化財センター調査報告第50集　東京都埋蔵文化財センター
冨樫泰時　1995a「縄文人の天体観測予察―大湯環状列石を中心として」東アジアの古代文化82号　大和書房

1995b「秋田県大湯遺跡」『縄文時代における自然の社会化』季刊考古学・別冊6　雄山閣出版

1999「縄文人の天体観」東アジアの古代文化100号　大和書房

戸田哲也　2001「小比企向原縄文集落と滑坂縄文集落」『南八王子地区遺跡調査報告　総括編』　八王子市南部地区遺跡調査会

中村　大　2003「日本先史における特別な数―縄文土器について―」月刊考古学ジャーナル第500号　ニュー・サイエンス社

中山真治　1995「縄文土器の時期細分と集落景観―既刊報告書の再検討―」『縄文中期集落の新地平』　宇津木台地区考古学研究会

丹羽佑一　2003「国府遺跡における縄文前期人の他界観」『続文化財学論集』　文化財学論集刊行会

沼澤茂美　2002「縄文人の見上げた星空」『奥三面展』　新潟県立歴史博物館

花輪宏・浅川裕之　1987『堀之内』市川市堀之内土地区画整理事業予定内遺跡発掘調査報告書　市川市堀之内土地区画整理組合設立準備委員会・市川市教育委員会

原田昌幸　1998「縄文人と山」季刊考古学第63号　雄山閣出版

春成秀爾　1982「縄文社会論」『縄文文化の研究８　社会・文化』　雄山閣出版

1999a「親族組織の考古学」『歴博セミナー　考古資料と歴史学』　吉川弘文館

1999b「狩猟・採集の祭り」『古代史の論点⑤神と祭り』　小学館

藤田富士夫　1998『縄文再発見　日本海文化の原像』　大巧社

1999「縄文尺はなぜ使われたのか」『最新縄文学の世界』　朝日新聞社

2002「富山県極楽寺遺跡」『縄文ランドスケープ』　有朋書院

古屋敷則雄　1996「環状土壙群・列石の方位と配置の規則性について」動物考古学第６号　動物考古学研究会

堀越正行　2000a「宮本台貝塚」『千葉県の歴史　資料編考古１（旧石器・縄文時代）』県史シリーズ９　千葉県

2000b「古作貝塚」同上

2000c「権現原貝塚」同上

松本　司　1999『風水ウォーキング　古代遺跡謎解きの旅』小学館謎解き古代史シリーズ１　小学館

馬橋利行　1998「縄文中期前半の住居柱穴配置類型と規格性の抽出による集落分析の一試案」『縄文集落研究の新地平２』　縄文集落研究グループ

三上徹也　1993「縄文時代居住システムの一様相―中部・関東地方の中期を中心として―」駿台史学第88号　駿台史学会

宮尾　亨　1999「自然の中に取り込んだ人工空間としての記念物」『最新縄文学の世界』　朝日新聞社

2002a「環状列石の縄文ランドスケープ」『縄文ランドスケープ』　有朋書院

2002b「奥三面の縄文世界」『奥三面展』　新潟県立歴史博物館

柳沢兌衛　1999「大湯環状列石と二至二分の太陽」東アジアの古代文化99号　大和書房

吉川裕司　2002「山と太陽の位置の確認方法」『縄文ランドスケープ』　有朋書院

渡辺　新　1991『縄文時代集落の人口構造』千葉県権現原貝塚の研究Ⅰ

2001「権現原貝塚の人骨集積から集落の人口構造を考える」『シンポジウム　縄文人と貝塚　関東における埴輪の生産と供給』　学生社

渡辺　誠　1995「底を抜かれた人面装飾付き土器」『人類の創造へ―梅原猛との交点から』梅原猛記念論文集　中央公論社

2001「縄文時代の人面・土偶装飾付き土器」『特別展　顔のついた土器』　大田区

和田　哲　2002「太陽祭祀と縄文遺跡」『縄文ランドスケープ』　有朋書院

（無所属）